

## 2. 検出された遺構と遺物

調査区は敷地の中央やや西寄りに位置し、その北端の一部は第135次調査区と重複する。昭和56年当時の学術調査では、覆土の掘り下げを行っていなかった古代の堅穴建物2棟（SI274・275）も、今回は調査の対象に含めることにした。

地層は現地表面より約0.9～1mの深さまで表土で覆われ、その直下ではⅢc層が検出された。周辺域では、通常、Ⅲb層上面で古代の遺構を確認することができるが、Ⅲb層より上位の堆積層は後世の耕作等により消失してしまったようで、ローム層への漸移層であるⅢc層も部分的にしか残存していない状況であった。そのため、古代の遺構の多くはソフトロームのⅣ層上面でプランの確認作業を行い、その結果、平安時代の堅穴建物5棟（SI274・275・828～830）、東山道武蔵路の東側側溝（SD5）、中世の土坑11基（SK3465～3475）、近世以降と思われる溝4条（SD140・143・439・440）および時期不詳のピット36基を検出した（第44図）。

### (1) 堅穴建物

#### SI274 堅穴建物（第45～49図、表5、写真36～39）

調査区北東隅で検出した。覆土の殆どは削平されており、かろうじて床面が遺存する程度の確認状況であった。また、建物北西の一部は調査区の外側にも展開しているが、建物の平面形は長辺4.1m、短辺3.2mの東西方向に長軸をもつ長方形を呈し、確認面から床面までの深さ、および貼り床の厚みはともに約15cm程度であった。東壁と北壁中央付近にカマドが設けられ、仮に東壁のカマド（カマド1）の中心を建物の主軸と見立てた場合、その方位は僧寺中軸線に対して89°09′を示している。床面はほぼ平坦で、北壁側のカマド2前面を中心として硬化しており、四方の壁沿いには幅20cm×深さ15cmほどの周溝が巡る。壁はやや垂直気味に立ち上がるが、壁高は最も遺存状況の良い南壁付近でも15cm程度であった。

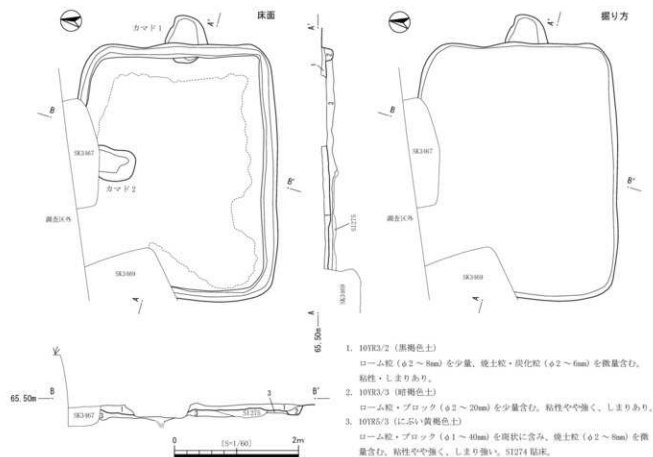
西側にSI275堅穴建物、さらにSK3467・3469・3473の土坑と重複しており、覆土の切り合い関係からSI275よりも新しく、3基の土坑はいずれも本遺構より新しい時期の所産と判断した。

カマドは白色粘土ブロックを構築材としているものの2基ともに残存状況は極めて悪く、詳細な構造の把握は困難であるが、東壁側のカマド1は周溝によって燃焼部が壊され、北壁側のカマド2は燃焼部が良好に遺存していることから、カマドは1から2へ造り替えられているものと思われる。

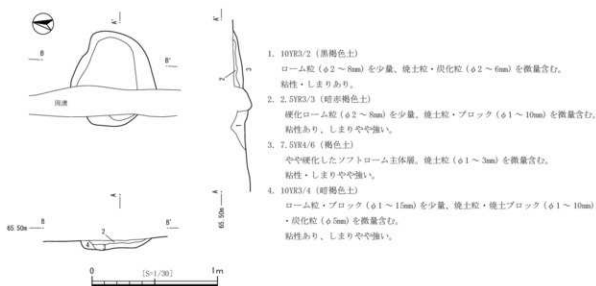
遺物はカマド2付近を中心に、土師器・土師質土器・須恵器・灰軸陶器・瓦・鉄製品・石器（石製品）が床面全体に疎らな分布で出土しているが、このうち5点を図示した（第49図）。

1は内面に黒色処理を施す土師器の高台付椀である。内面全体から口縁部外面にかけてヨコ方向の入念なヘラミガキ、外面体部は不定方向のヘラケズリ調整を行い、やや外開き気味の高い高台を貼り付けている。2は東金子窯産と思われる須恵器坏で、見込み外周部に明瞭な段を形成し、張り出した腰部から外上方に立ち上がる器形を呈している。口縁部～体部内外面に煤が付着し、底部外面には墨痕が認められるが、字形は判読不能である。3は器肉の薄い須恵器甕の胴部片で、外面には並行引き、内面に円形の当て具痕が認められる。胎土に白色針状物質を含み、南比企窯産と思われる。4は砂岩製の棒状で、端部に被熱痕が認められる。カマド2の燃焼部にあたる範囲から出土しており、カマドの袖の補強材として使用されたものとみられる。5は基部を欠損するが黒曜石製の無蓋石竈で、後述する自然科学分析結果から星ヶ塔産と判断される。

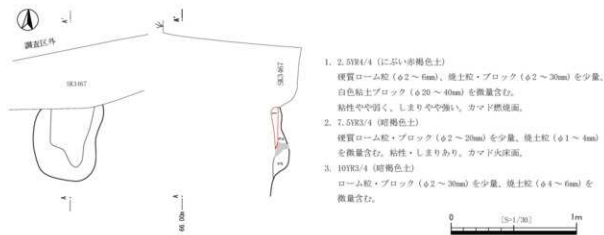
これらの図化した遺物は、いずれも床面付近から出土しているが（第54図）、もっとも所産年代の新しい1は武蔵国府編年のH7期（10世紀後半）にあたり、建物の廃絶時期も10世紀後半以降と思われる。



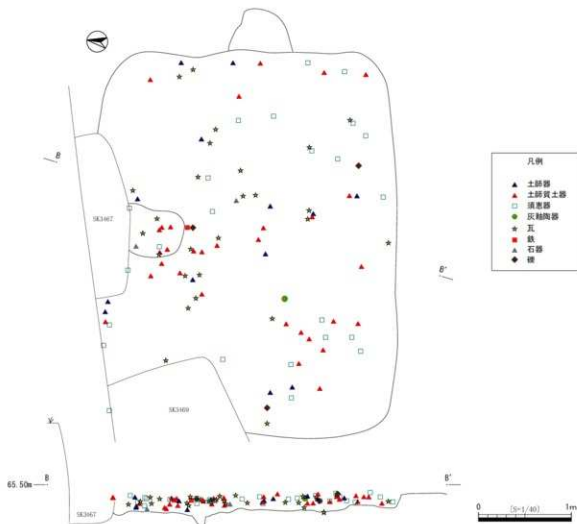
第45図 SI274 竪穴建物



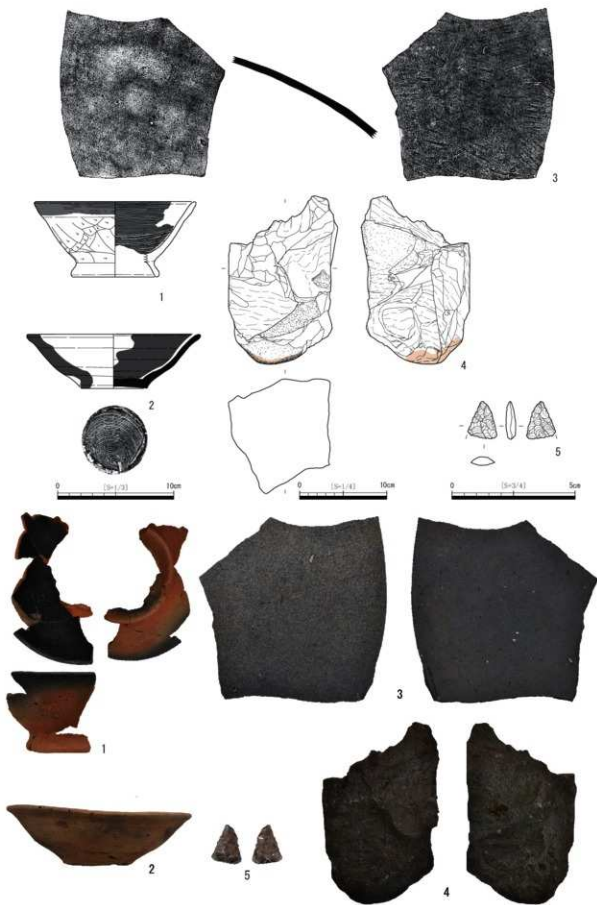
第46図 SI274 カマド1



第 47 図 S1274 カマド 2



第 48 図 S1274 遺物出土分布図



第49圖 SI274出土遺物

表5 SI274 出土遺物観察表—土器・石製品・石器—

掲載番号	種別 器種	出土 位置	口徑 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	残量	備考
1	土師器 埴	SI274 覆土	14.0 6.4 7.4	高台部はやや高く、八字状に開く。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや肥厚する。	体部外面上端から下端にかけてヘラケズリの後、口縁部ヨコミガキ。内面下半タテヘラミガキの後、全体ヨコヘラミガキ。内黒処理。	口縁部へ 底部 1/3	外面：明赤褐色 2.5YR5/6、内面：黒色 5Y 5/0。堅い。焼成普通。小砂粒微量。微砂粒少量。高台高1.3cm。
2	須恵器 坏	SI274 覆土	15.0 4.7 5.6	体部は直立させながらやや流線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	コテロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	口縁部へ 底部 2/3	内外面：褐色 7.5YR7/6。やや堅い。焼成普通。φ1～4mmの角粒微量。微砂粒少量。石英微量。
3	須恵器 甕	SI274 覆土	— (7.1) —	胴部はやや内傾する。	胴部内面アテ具執。胴部外面に並行タタキを施す。	小片	内外面：灰色 5Y5/1。堅い。焼成良好。微砂粒少量。φ1～3mmの白色粒微量。陶磁状骨針やや多量。南北企圖。

掲載番号	種別 器種	出土 位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	特徴	石材	備考
4	埴状陶	SI274 カマド2	19.4	12.0	11.5	3,020	自然面を一部残す。	砂岩	大型の角礫を用いる。破断面は鋭角。
5	石鏡	SI274 覆土	1.4	1.1	0.3	0.5	形態は平基無茎鏡。1316完形に近い。	黒曜石	上縁部・基部左端部欠損。両側縁に細かな調整が施されている。星+塔産。



写真36 SI274 遺物出土状況 (南から)



写真37 SI274 掘り方検出状況 (南から)



写真38 SI274 カマド1 掘り方検出状況 (西から)



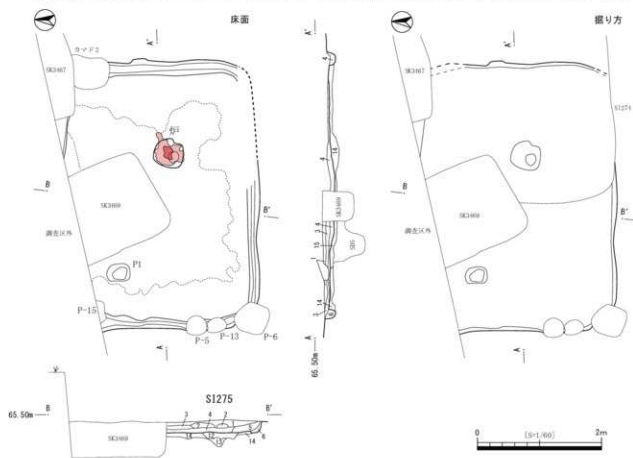
写真39 SI274 カマド2 掘り方検出状況 (南から)

### SI275 竪穴建物（第50～54図）

調査区北辺中央で検出した。SI274同様、覆土の殆どは削平され、かろうじて床面が遺存する程度であった。建物の平面形は長辺4.4m、短辺3.0m以上の東西に長軸をもつ長方形を呈し、確認面から床面までの深さは約20cm、貼床の厚みは約10cm程度であった。床面はほぼ平坦で、中央付近は硬化しており、東・南・西壁に沿って幅20cm×深さ10cmの周溝が巡る。壁はやや直立気味に立ち上がる。北壁の大部分は調査範囲の外へ伸びており、カマドの有無は判別できないが、床面中央やや東寄りに地床炉と思われる焼土が確認された。

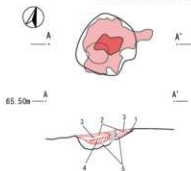
炉は直径50cmほどの円形プランを呈し、深さは15cmをはかり、明瞭な火床を形成している。また、炉から約2m西側へ離れた床面には径30cm×深さ30cmの小ピットがあり、貼り床を壊して構築しているが、他に組み合う同種のピットは無く、柱穴か否かは不明である。建物の主軸は南壁の走行ラインを基準とした場合、僧寺中軸線に対して87°42′東偏する。SD5（東山道武蔵路の東側側溝）・SI274 竪穴建物やSK3467・3469 土坑、P-5・6・13・15 小穴と重複しており、覆土の切り合い関係からSD5よりも新しく、土坑・小穴より古いと判断した。

遺物は、炉より西側を中心に分布し、土師器・土師質土器・須恵器・灰釉陶器・瓦・礫・炭化物等が出土している。このうち3点を図化した（第53図）。1・2はともに東金子窯産の須恵器坏で、砂質で褐色の粗い胎土を有する。2の内面見込みには煤が付着している。どちらも底部外面は回転糸切を施し、底径は5.4～5.6cmをはかる。9世紀中頃の製品であろう。3は粘土板一枚造りで凸面に縄叩きを施す平瓦である。2の須恵器は重複するSK3469、同じく3の平瓦も重複するSI274 覆土中から接合破片が出土している。遺物の様相から、本竪穴建物の廃絶年代は9世紀中葉以降と思われる。



第50図 SI275 竪穴建物

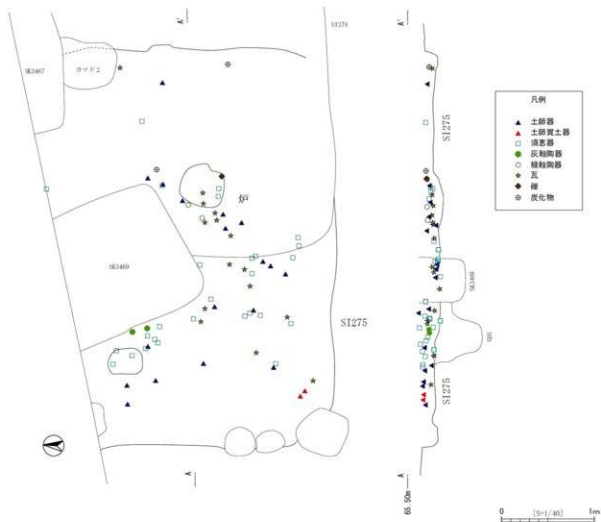
- 10YR3/2 (黒褐色土) ローム粒 ( $\phi 2 \sim 8\text{mm}$ ) を少量、焼土粒・炭化粒 ( $\phi 2 \sim 6\text{mm}$ ) を微量含む。粘性・しまりあり。
- 10YR3/3 (暗褐色土) ローム粒・ブロック ( $\phi 2 \sim 20\text{mm}$ ) を少量含む。粘性やや強く、しまりあり。
- 10YR3/2 (黒褐色土) ローム粒 ( $\phi 2 \sim 6\text{mm}$ ) を少量、ロームブロック ( $\phi 10 \sim 20\text{mm}$ ) を微量含む。粘性・しまりあり。
- 10YR3/1 (黒褐色土) ローム粒 ( $\phi 1 \sim 6\text{mm}$ ) を少量含む。粘性・しまりあり。
- 10YR3/2 (黒褐色土) ローム粒 ( $\phi 2 \sim 4\text{mm}$ ) を少量、ロームブロック ( $\phi 10 \sim 20\text{mm}$ ) を微量含む。粘性・しまりあり。
- 10YR4/1 (褐灰色土) ローム粒 ( $\phi 2 \sim 6\text{mm}$ ) を少量含む。均質土。粘性あり、しまりやや弱い。
- 10YR4/1 (褐灰色土) ローム粒 ( $\phi 2 \sim 4\text{mm}$ ) ・焼土粒 ( $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ ) を微量含む。粘性・しまりあり。
- 10YR3/2 (黒褐色土) ローム粒 ( $\phi 1 \sim 8\text{mm}$ ) を少量、焼土粒・炭化粒 ( $\phi 2 \sim 4\text{mm}$ ) を微量含む。粘性やや強く、しまりあり。
- 10YR3/3 (暗褐色土) ローム粒・ブロック ( $\phi 4 \sim 15\text{mm}$ ) を少量、焼土粒 ( $\phi 2 \sim 4\text{mm}$ ) を微量含む。粘性・しまりやや強い。
- 10YR3/4 (暗褐色土) ローム粒 ( $\phi 2 \sim 6\text{mm}$ ) をやや多く、ロームブロック ( $\phi 10 \sim 20\text{mm}$ ) を少量含む。粘性・しまりやや強い。SI275 周縁。



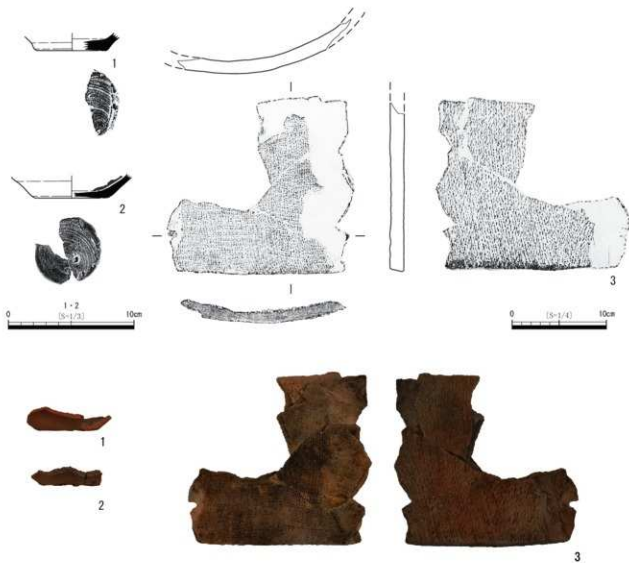
2. 5YR2/2 (極暗赤褐色土) 硬質ローム粒・ブロック ( $\phi 2 \sim 10\text{mm}$ ) ・焼土粒 ( $\phi 2 \sim 6\text{mm}$ ) を少量含む。粘性あり、しまりやや強い。
- 10R4/4 (赤褐色土) 焼土主体層。硬質ローム粒 ( $\phi 2 \sim 6\text{mm}$ ) ・炭化粒 ( $\phi 4 \sim 8\text{mm}$ ) を少量含む。粘性やや弱く、しまり強い。
- 10R6/6 (赤褐色土) 焼土主体層。粘土粒・ブロック ( $\phi 3 \sim 10\text{mm}$ ) を屑状に含み、炭化粒 ( $\phi 3 \sim 6\text{mm}$ ) を微量含む。粘性弱く、しまり強い。
- 10R4/6 (赤褐色土) 焼土主体の均質土層。地床が燃焼面。粘性を欠き、しまり強い。
2. 5YR3/1 (暗赤褐色土) 硬質ロームブロック ( $\phi 10 \sim 30\text{mm}$ ) ・焼土粒・ブロック ( $\phi 3 \sim 15\text{mm}$ ) を少量含む。地床が燃り方層。粘性やや弱く、しまりやや強い。



第 51 図 SI275 切



第 52 図 SI275 遺物出土分布図

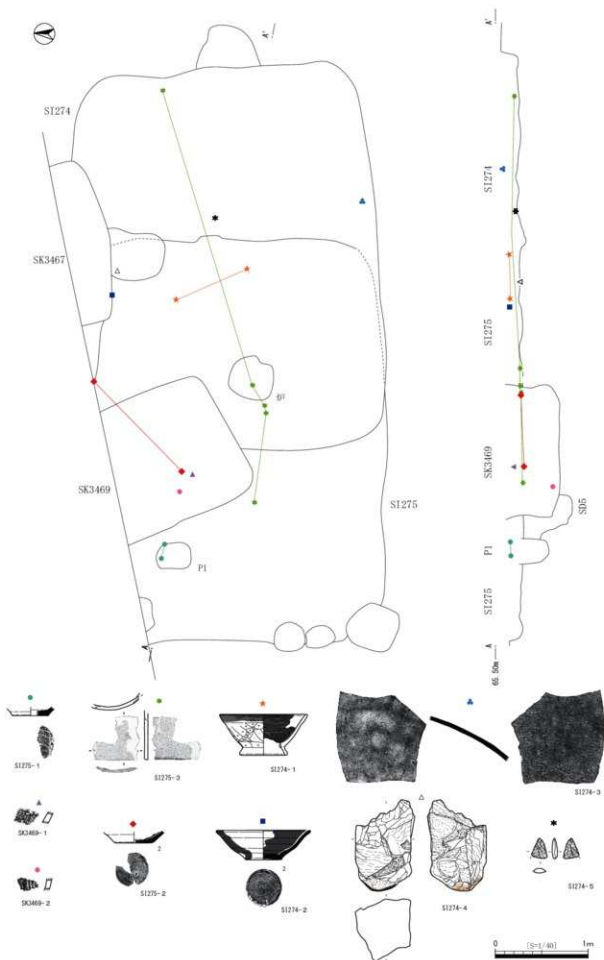


第53図 SI275出土遺物

表6 SI275出土遺物観察表-土器・平瓦-

掲載番号	種別 器種	出土 位置	口径 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	残量	備考			
1	須恵器 杯	SI275 覆土	— (1.4) (5.4)	やや内厚な底部から、体部はやや直線的に立ち上がる。	クロ調整の後、底部は回転車切りをし、無調整。	体部～ 底部 1/3	内外面：にぶい褐色 7.5YR5/4、やや強い。焼成普通。φ1～4mmの角礫微量、小砂粒少量、石英粒微量。			
2	須恵器 杯	SI275 SK3469 覆土	— (1.8) (5.6)	薄い底部から、体部は直線的に立ち上がる。	クロ調整の後、底部は回転車切りをし、無調整。	体部～ 底部 1/2	外面：褐色 5YR6/6、内面：明赤褐色 5YR5/6、やや強い。焼成普通。微砂粒少量、石英微量。			
掲載番号	出土 位置	狭楕 広楕 金長 (cm)	厚さ (cm)	成・整形の特徴				備考		
				素材	凹面		凸面		端面	
					布目	特徴	叩き	特徴		特徴
3	SI275 G1	— — (12.8)	1.3	粘土板	19×20	—	調目 L10	調目叩きの後、狭楕縁ナデ。	狭端面ヘラケズリ。	黄褐色 10YR8/6、やや軟からい。焼成普通。φ1～2mmの角礫微量、微砂粒やや多量。





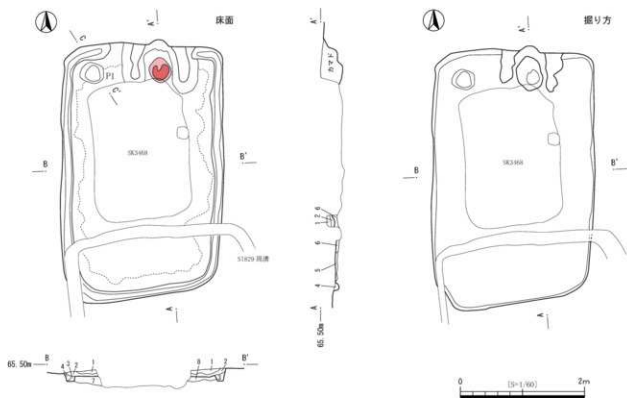
第 54 圖 SI274・275・SK3469 掲載遺物分布図・接合図



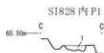
写真 40 SI275床面検出状況(南から)



写真 41 SI275炉土層堆積状況(南から)



1. 10YR4/1 (褐灰色土) ローム粒(φ1~4mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ2~8mm)を微量含む。粘性・しまりあり。
2. 10YR3/4 (暗褐色土) ローム粒(φ2~8mm)をやや多く。ロームブロック(φ10~20mm)を少量、焼土粒(φ2~6mm)を微量含む。粘性・しまりやや強い。
3. 10YR3/4 (暗褐色土) ローム粒・ブロック(φ2~20mm)を塊状に含む。粘性やや強く、しまりあり。S1828 周溝。
4. 10YR4/6 (褐色土) ズフトローム主体層。焼土粒(φ1~4mm)を少量含む。粘性・しまりやや強い。S1828 周溝。
5. 10YR3/2 (黒褐色土) ローム粒(φ4~6mm)・ロームブロック(φ10~40mm)を塊状に含む。粘性・しまりやや強い。
6. 10YR4/3 (にぶい黄褐色土) ローム粒(φ4~6mm)を塊状に含む。粘性やや強く、しまりあり。S1828 貼床。
7. 10YR3/3 (暗褐色土) ローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量含む。粘性弱く、しまりやや強い。S1828 貼床。
8. 10YR4/3 (にぶい黄褐色土) ローム粒・ブロック(φ2~20mm)を少量、焼土粒(φ1~5mm)を微量含む。粘性弱く、しまりやや強い。S1828 貼床。



1. 7.5YR3/3 (暗褐色土) 粘土粒(φ1~5mm)を少量、焼土粒(φ1~4mm)・炭化粒(φ1~2mm)を微量含む。粘性・しまり弱い。

第 55 図 SI282 壁穴建物

#### SI828 竪穴建物（第55～64図、表7、写真42～45）

調査区中央やや北寄りの位置で検出した。平面形は長辺4.1m、短辺2.5mの長方形を呈し、確認面から床面までの深さは約0.1m、貼床の厚みも約0.1mで、本来の覆土の多くは後世に削平を受け、遺構の遺存状況は極めて悪いものであった。北壁中央付近にカマドを敷設し、その中心を建物の主軸と見た場合、僧寺中軸線に対して8°18′東偏する。建物の中央付近は中世以降の土坑（SK3468）で深く壊されているが、床面はほぼ平坦を呈し、四周の壁に沿って幅15cm×深さ10cmの周溝が巡る。また、カマドの西側には、径40cm×深さ10cmの不整形形状ピットが1基設けられている。壁はわずかに残存する程度であるが、外上方に向かってやや緩く立ち上がる。

カマドは灰白色粘土を構築材として用い、竪穴の壁面内側に位置する燃烧部幅は約50cm、奥行きは80cmを有する。煙道はわずかに壁面を掘り込んでいただけのようにみえるが、主軸方向の断面図を観察すると、燃烧部の奥壁からテラス状に煙道が伸びており、その先端は北壁から40cm以上突出していたものと思われる。また、カマドの覆土中からは大量の瓦片が出土し（写真43）、白色粘土の補強材として瓦片を多用していた可能性が考えられる。南側にSI829竪穴建物、中央にSK3468土坑と重複しているが、覆土の切り合い関係からいづれの遺構よりもSI828が古いと判断した。

遺物は、カマド付近を中心として、土師器・土師質土器・須恵器・灰軸陶器・緑釉陶器・瓦・鉄製品等の遺物が出土しているが、このうち19点の遺物を図示した（第53～64図）。1～3は東金子窯産の須恵器杯および埴である。1は赤褐色の粗い砂質な胎土で、埴と思われる。2は口縁部内外面に煤が付着し、3の器面は火服れによる荒れが顕著である。4は土師質土器の埴である。小石を多く含む粗い胎土で、内面見込みには渦巻状の粘土紐巻き上げ痕がある。5・6は口縁部～体部の内外面にハケ塗り施軸する灰軸陶器の椀であるが、6の外面にかるうじて萌黄色のガラス質成分が付着してお



写真42 SI828 遺物出土状況（南から）



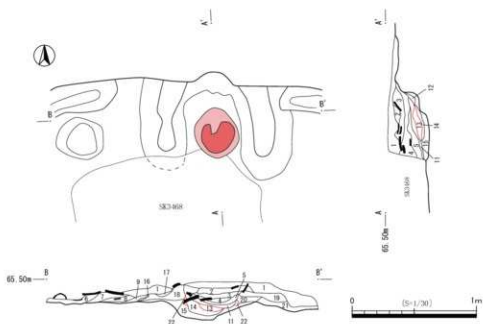
写真43 SI828 カマド 遺物出土状況（南東から）



写真44 SI828 カマド火床面検出状況（南から）

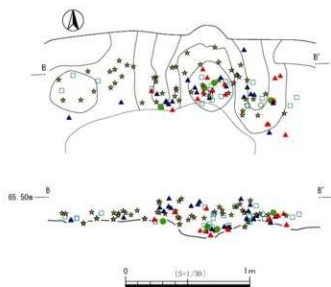
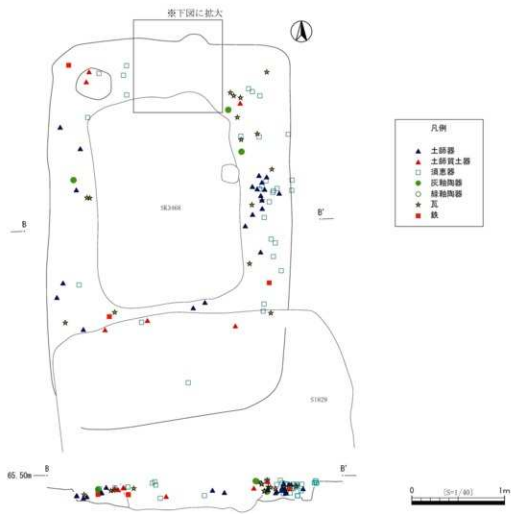


写真45 SI828 P1（南西から）

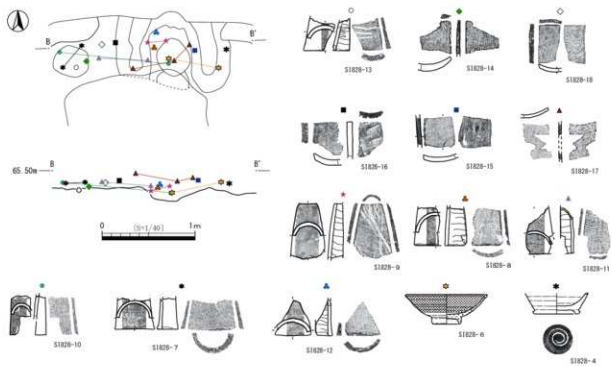
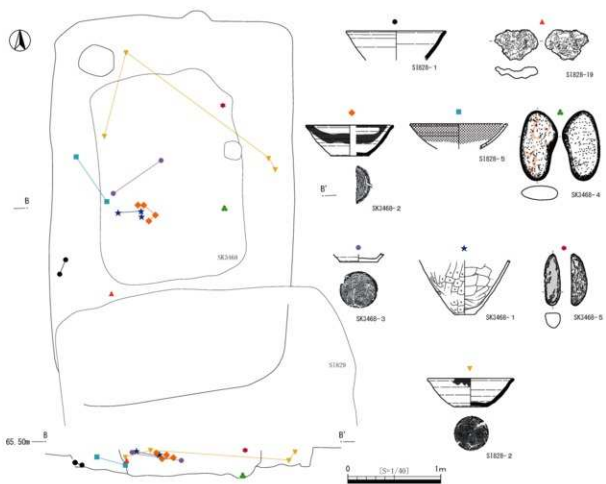


1. 5YR3/3 (暗赤褐色土) 焼土粒 ( $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ ) を含み、中央にロームブロック ( $\phi 20\text{mm}$ )、ローム粒 ( $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ ) を少量含む、粘性弱く、しまりやや強い。
2. 10YR3/3 (暗褐色土) 焼土ブロック ( $\phi 10\text{mm}$ ) を主に、ローム粒 ( $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ ) を微量含む、粘性弱く、しまり強い。
3. 7.5YR3/1 (黒褐色土) 焼土粒・ブロック ( $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ ) を含み、ローム粒 ( $\phi 4\text{mm}$ )・炭化粒 ( $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ ) を微量含む、粘性弱く、しまり強い。
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐色土) 焼土粒 ( $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ ) を少量、ローム粒 ( $\phi 2 \sim 4\text{mm}$ )・炭化粒 ( $\phi 2 \sim 6\text{mm}$ ) を微量含む、粘性弱く、しまり強い。
5. 7.5YR4/3 (褐色土) 焼土ブロック ( $\phi 10 \sim 15\text{mm}$ ) を含み、炭化粒 ( $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ )、ローム粒 ( $\phi 3 \sim 6\text{mm}$ ) を微量含む、粘性弱く、しまり強い。
6. 10YR3/2 (黒褐色土) 粘土粒 ( $\phi 1 \sim 6\text{mm}$ ) を含み、焼土粒 ( $\phi 3 \sim 6\text{mm}$ ) を少量、炭化粒 ( $\phi 2 \sim 3\text{mm}$ ) を微量含む、粘性弱く、しまりやや強い。
7. 10YR4/4 (褐色土) 粘土粒 ( $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ ) を含み、ローム粒 ( $\phi 2 \sim 6\text{mm}$ ) を少量、焼土粒 ( $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ ) を微量含む、粘性弱く、しまりやや強い。
8. 7.5YR4/3 (褐色土) ローム粒 ( $\phi 1 \sim 8\text{mm}$ ) を含み、粘土粒 ( $\phi 2 \sim 6\text{mm}$ ) を少量、焼土粒 ( $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ ) を微量含む、粘性弱く、しまりやや強い。
9. 10YR4/2 (灰黄褐色土) 粘土粒 ( $\phi 2 \sim 6\text{mm}$ ) を含み、焼土粒 ( $\phi 2\text{mm}$ )・ローム粒 ( $\phi 5 \sim 8\text{mm}$ ) を微量含む、粘性弱く、しまりやや強い。
10. 10YR4/3 (にぶい黄褐色土) 焼土粒 ( $\phi 2 \sim 10\text{mm}$ )・炭化材 ( $\phi 10\text{mm}$ ) を少量、ローム粒 ( $\phi 1 \sim 6\text{mm}$ ) を微量含む、粘性弱く、しまりやや強い。
11. 2.5YR4/6 (赤褐色土) 焼土粒・ブロック ( $\phi 5 \sim 10\text{mm}$ ) 主体、カマド断後面、粘性弱く、しまりやや強い。
12. 10YR4/3 (褐色土) 炭化粒 ( $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ ) を微量含む、粘性を欠き、しまりやや強い。
13. 10R4/6 (赤色土) 焼土粒・ブロック ( $\phi 5 \sim 30\text{mm}$ ) 主体弱、カマド火床面、粘性欠き、しまり強い。
14. 10YR5/6 (黄褐色土) ソフトローム主体弱、ロームブロック ( $\phi 2 \sim 10\text{mm}$ ) を少量、焼土粒 ( $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ ) を微量含む、粘性欠き、しまり強い。
15. 2.5Y5/6 (黄褐色土) ソフトローム主体弱、ローム粒 ( $\phi 2 \sim 6\text{mm}$ ) を微量含む、カマド断り方、粘性やや弱く、しまり強い。
16. 10YR4/2 (灰黄褐色土) 灰白色粘土粒 ( $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ ) を少量、炭化粒 ( $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ ) を微量含む、粘性を欠き、しまり弱い。
17. 7.5YR3/2 (黒褐色土) 灰白色粘土粒 ( $\phi 3 \sim 6\text{mm}$ ) を少量、ローム粒 ( $\phi 2 \sim 8\text{mm}$ ) を微量含む、粘性やや弱く、しまりあり。
18. 10YR4/3 (にぶい黄褐色土) ローム粒 ( $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ ) を少量、焼土粒 ( $\phi 2 \sim 5\text{mm}$ )・粘土粒 ( $\phi 1 \sim 6\text{mm}$ ) を微量含む、粘性弱く、しまり強い。
19. 10YR4/4 (褐色土) 焼土粒 ( $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ ) を少量含む、粘性弱く、しまりやや強い。
20. 10YR4/1 (褐色土) 灰白色粘土ブロック ( $\phi 10 \sim 30\text{mm}$ ) を含み、焼土粒 ( $\phi 1 \sim 6\text{mm}$ ) を微量含む、粘性弱く、しまりやや強い。
21. 7.5YR3/1 (黒褐色土) 粘土粒 ( $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ ) を少量、焼土粒 ( $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ ) を微量含む、粘性弱く、しまりやや強い。
22. 5YR3/8 (明赤褐色土) 焼土主体弱、カマド断り内側の断後面、粘性を欠き、しまり強い。

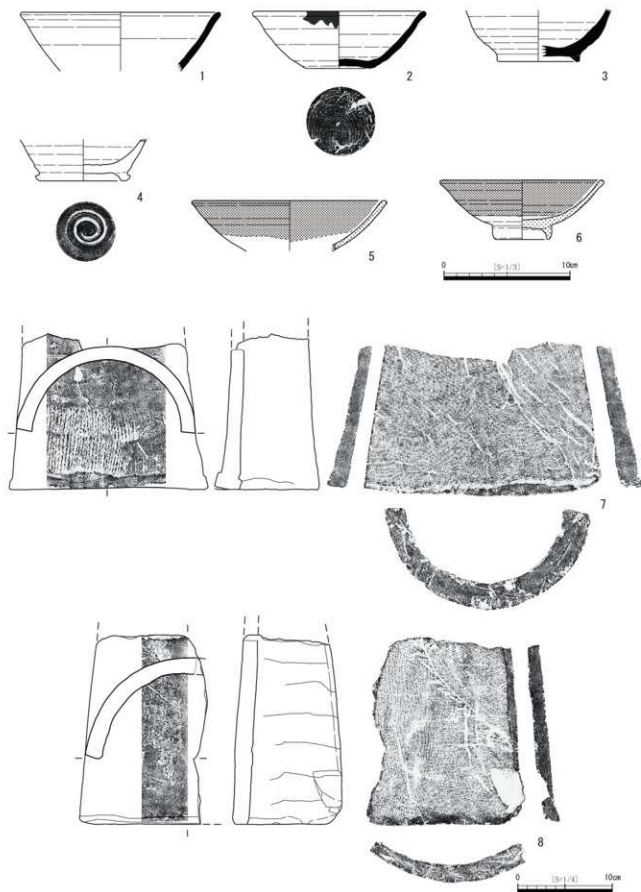
第56図 SI828 カマド



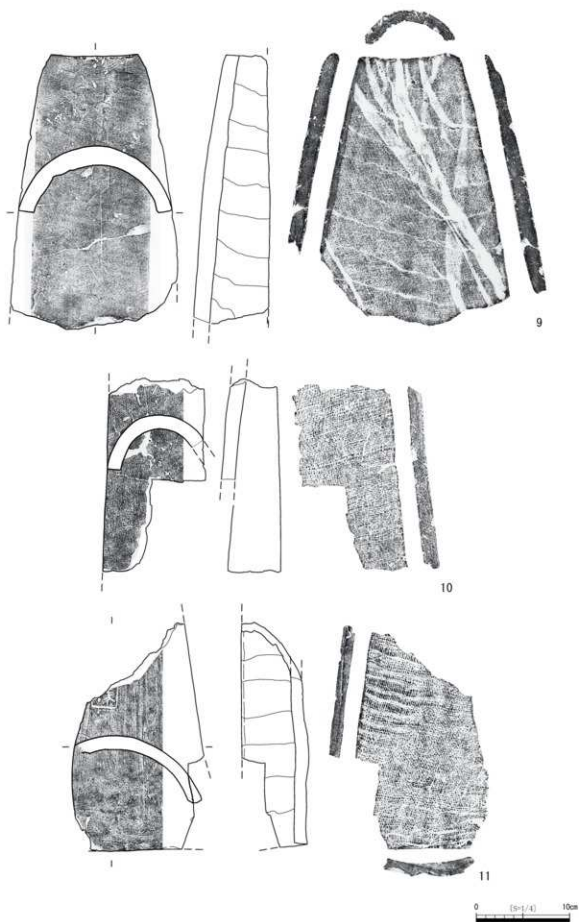
第 57 図 S1828・カマド遺物出土分布図



第 58 圖 S1828・SK3468 掲載遺物出土状況図

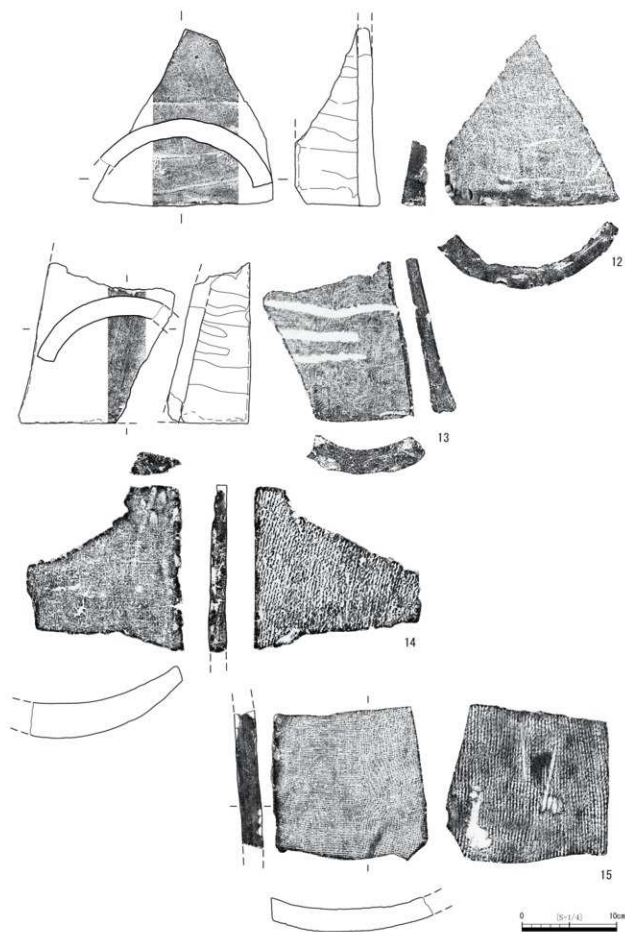


第 59 圖 SI828 出土遺物 (1)

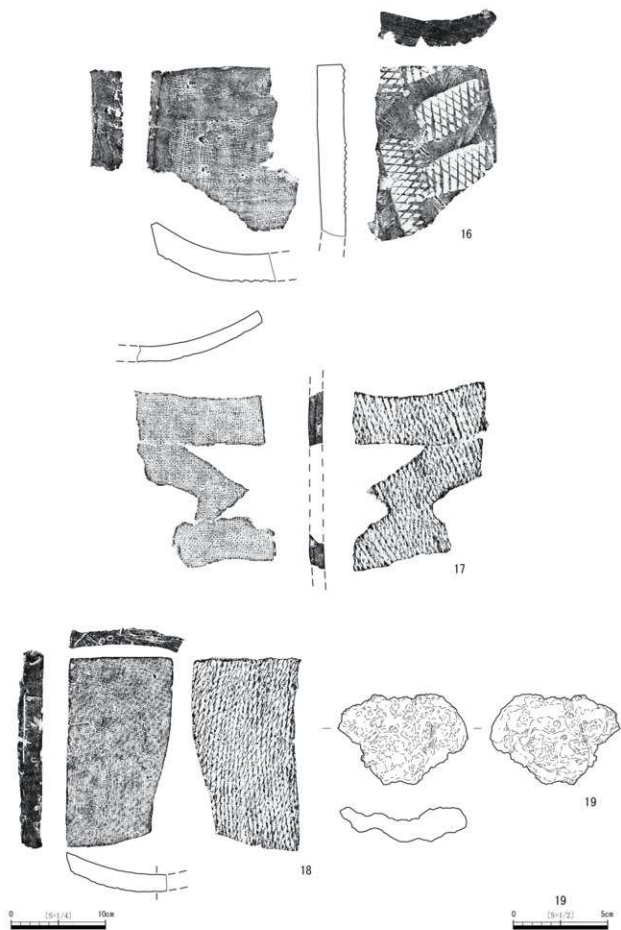


第60圖 S1828 出土遺物(2)





第 61 圖 SI828 出土遺物 (3)



第 62 図 S1828 出土遺物 (4)



第 63 圖 SI828 出土遺物 (5)



第 64 圖 SI828 出土遺物 (6)

り、どちらも釉調の発色は極めて悪い。6の高台は三日月状を呈し、底部外面は回転ヘラケズリを施している。6・7ともに、広義の黒笹90号窯式の要素を留めている。須恵器を含めて、これらは9世紀後半頃の土器群であろう。

7～18は瓦で、このうち7～13は丸瓦(男瓦)、14～18は平瓦(女瓦)を掲げた。丸瓦はいずれも粘土紐を素材として、凸面調整は横位のヘラナゲを基調とするが、7・8には縄叩きの痕跡がある。また11の凸面には、横沢郡を示す「横」の押印、13の凹面には指ナゲが認められる。一枚造りの平瓦は、14・15・17・18が凸面縄叩き、16は斜格子叩きを施している。19は楕形の鉄洋である。

表7 S1828 出土遺物観察表(1) - 土器・丸瓦 -

掲載番号	種別 器種	出土 位置	口縁 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	残量	備考		
								器形の特徴	成・整形の特徴
1	須恵器 坏	S1828 覆土	15.8 (4.7)	体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。壺状坏。	口縁調整。	口縁部 小片	内外面：棕色 7.5YR7/6。軟らかい。焼成普通。φ1～2mmの角縁微塵。微砂粒少量。石英他微塵。		
2	須恵器 坏	S1828 カマド 崩壊土	13.8 4.6 5.1	体部はやや内湾気味に立ち上がる。	口縁調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	口縁部～ 底部 2/3	内外面：灰色 7Y6/1。やや堅い。焼成普通。φ1～3mmの角縁微塵。微砂粒少量。内外面に塵付着。		
3	須恵器 高台付焼	S1828 PI	13.8 4.6 5.2	体部は内湾気味に立ち上がる。高台部は低く、八字状に大きく開く。	口縁調整の後、底部は回転糸切りをし、高台貼付。	体部～ 底部 1/2	外面：灰色 5Y4/1。内面：灰オリーブ色 5Y5/3。やや堅い。焼成普通。小砂粒やや多量。内外面に塵付着。高台高0.4cm。		
4	土師質土器 カマド 高台付焼	S1828 崩壊土	(13.3) (6.8)	体部は内湾気味に立ち上がる。高台部は低く、八字状に大きく開く。	口縁調整の後、底部は回転糸切りをし、高台貼付。底部内面に溝巻き調整。	体部～ 底部 ほぼ完形	外面：オリーブ褐色 5Y3/2。内面：黒褐色 2.5Y3/1。やや堅い。焼成普通。φ1～6mmの角縁少量。小砂粒やや多量。高台高0.7cm。		
5	灰緑陶器 坏	S1828 SK3468 覆土	(15.0) (4.0)	体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁調整の後、体部内外面上部に刷毛塗りによる淡黄色の施軸。	口縁部～ 体部 1/3	内外面：灰色 5Y6/1。やや堅い。焼成普通。微砂粒少量。		
6	灰緑陶器 坏	S1828 カマド 崩壊土	13.0 4.7 4.4	体部は内湾気味に立ち上がる。高台部はやや高く、ゆるやかに内湾する三日月高台。	口縁調整の後、底部は回転糸切りをし、高台貼付。体部内外面上部に刷毛塗りによる灰白色の施軸。	口縁部～ 底部 1/3	外面：灰オリーブ色 5Y6/2。内面：灰色 5Y6/1。やや堅い。焼成普通。小砂粒少量。高台高1.1cm。		
掲載番号	出土 位置	鉄塊 広幅 全長 (cm)	厚さ (cm)	成・整形の特徴				備考	
				素材	凹面		凸面		端部
布目	特徴	叩き	特徴		特徴				
7	S1828 カマド 崩壊土	— (21.1)	1.7	粘土	16×18 広端縁ナゲ。	縄目 叩	全体ヨコナゲの 溝、広端縁に縄目 叩き。	廣・側端面ヘラケズリ。	無段。灰オリーブ色 10Y6/2。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量。φ1～4mmの角縁少量。
8	S1828 カマド 崩壊土	— (12.7)	1.6	粘土 横紐	21×21 廣・側端縁ヘラケズリ。	—	全体ヨコナゲの 溝、側端縁面取り。	廣・側端面ヘラケズリ。	無段。棕色 7.5YR7/6。やや堅い。焼成普通。微砂粒多量。φ1～3mmの角縁やや多量。
9	S1828 カマド 崩壊土	— (12.7)	1.7	粘土 横紐	21×22 廣・側端縁ヘラケズリ。	—	全体ヨコナゲの 溝、側端縁面取り。	廣・側端面ヘラケズリ。	無段。棕色 7.5YR7/6。やや堅い。焼成普通。微砂粒多量。φ1～6mmの角縁やや多量。
10	S1828 カマド 崩壊土	— (9.4)	2.1	粘土 横紐	22×24 側端縁ヘラケズリ。	—	側端縁ヘラケズリ の後、全体ヨコナ ゲ。	廣・側端面ヘラケズリ。	無段。灰白色 2.5Y7/1。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量。φ1～2mmの角縁微塵。
11	S1828 カマド 崩壊土	— (20.8)	1.5	粘土板?	21×20 —	—	全体ヨコナゲの 溝、タテナゲ。中 心に「横」字の押 印。	側端面ヘラケズリ。	無段。灰色 5Y5/1。堅い。焼成普通。微砂粒やや多量。φ1～4mmの角縁微塵。微砂粒・海綿状骨針やや多量。粘土全量。
12	S1828 カマド 崩壊土	— (20.5)	1.9	粘土 横紐	21×22 広端縁ナゲ。	—	全体ヨコナゲ。	廣・側端面ヘラケズリ。	無段。灰色 5Y6/1。堅い。焼成普通。小砂粒やや多量。φ1～3mmの角縁微塵。
13	S1828 カマド 崩壊土	— (16.7)	2.2	粘土 横紐	26×28 一部ヨコナゲ。	—	側端縁ヘラケズリ。全体タテナゲ。	廣・側端面ヘラケズリ。	無段。灰色 5Y5/1。堅い。焼成普通。φ1～5mmの角縁・小砂粒やや多量。

表8 SI828 出土遺物観察表(2) - 平瓦・鉄滓 -

掲載番号	出土位置	鉄種 広幅 全長 (cm)	厚さ (cm)	成・整形の特徴					備考	
				素材	凹面		凸面			端面
					布目	特徴	叩き	特徴		特徴
14	SI828 カマド 崩壊土	— — (17.9)	3.7	粘土板	16×18	側端縁ナズ。	罫目 L9	罫目叩きの後、側 端縁ナズ。	広端面ナズ。側端面ヘラケ ズリ。	褐色 7.5V17/Ⅷ。やや軟らか い。焼成普通。φ1～8mm の角礫少量。微粒砂やや多 量。
15	SI828 カマド 崩壊土	— — (16.1)	2.3	粘土	19×22	側端縁ナズ。	罫目 L10	罫目叩き。	側端面ヘラケズリ。	灰色 10Y4/1。堅い。焼成良 好。φ1～11mmの角礫少量。 小粒砂多量。
16	SI828 カマド 崩壊土	— — (18.7)	2.4	粘土板	19×23	側端縁ヘラケズ リ。一部指ナズ。	羽格子	羽格子叩きの後、 無文部にナズ。	側端面ヘラケズリ。	灰色 10Y4/1。堅い。焼成良 好。φ1～9mmの角礫少量。 小粒砂多量。
17	SI828 カマド 崩壊土	— — (18.1)	1.6	粘土	18×18	—	罫目 L6	罫目叩き。	側端面ヘラケズリ。	灰色 7.5V15/Ⅰ。堅い。焼成普 通。φ1～3mmの角礫少量。 微粒砂多量。
18	SI829 カマド 崩壊土	— — (20.9)	2.1	粘土	27×29	側端縁ヘラケズ リ。	罫目 L7	罫目叩き。	狭・側端面ヘラケズリ。	灰オリーブ色 5V6/2。堅い。 焼成普通。φ1～6mmの角 礫少量。微粒砂多量。

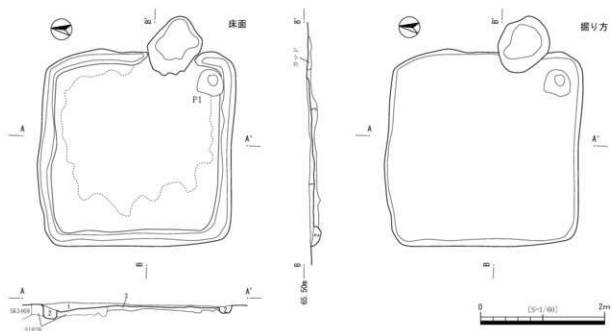
掲載番号	種別	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	特徴	素材	備考
19	陶形洋	SI828 覆土	7.0	4.6	1.8	54.8	比重軽く、磁力弱い磁気洋。	鉄	全体に腐食による錆痕が付着。

## SI829 竪穴建物(第14～16・21・22・28・29・73～77・110・111 図・第4表)

調査区ほぼ中央で検出し、北側はSI828と重複している。平面形は東西・南北とも3.1mの方形状を呈し、SI828と同様に、確認面から床面までの深さは約0.1mで、貼床の厚みも約0.1mで、覆土の上半部の殆どは後世に削平されている。東壁中央やや南壁寄りにカマドが構築され、その中心を建物の主軸と見立てた場合、僧寺中軸線に対して90°東偏する。床面は北側が南側に比べて相対的に低いが、全体的に硬化している。カマドを除く壁沿いの四周には幅20cm×深さ20cmの周溝が巡り、床面南東の隅部に径40cm×深さ15cmの円形ピットが1基認められる(P1)。P1覆土中からは、以下に示すように、複数個体の土器群が大型礫とともに遺棄された状態で出土している(写真49)。カマド本体の大部分も崩壊し、使用された構築材の特定もできないほどだが、東壁付近に形成された焼土は燃焼部の痕跡と思われる。重複するSI828竪穴建物とは、覆土の切り合い関係からSI829が新しいと判断した。

遺物は、床面付近から土師器・土師質土器・須恵器・灰軸陶器・緑軸陶器・瓦が全体的に疎らな分布で出土しているが、特にP1から土師器・土師質土器・須恵器がまとまって出土した。このうち9点を図化した。

1・2は土師質土器である。1は胎土に金雲母を含み、口縁部～体部内面にかけて煤が付着している。2は外面腰部から意図的な穿孔を施す。3～8は東金子窯産の須恵器で3・7・6は坏、4は碗、5は広口瓶の頸部である。このうち4・6・7は体部内外面に煤、5は外面に自然軸が付着している。灰軸陶器皿の9は口縁部～体部内外面に黄白色の灰軸をハケ塗りしているが、塗り方は雑で、殆どが剥がれている。高台は崩れた三日月状で、底部外面は回転ヘラケズリを施す。高台内には墨痕が認められるものの、字形は判然としない。10は緑軸陶器の碗もしくは皿で、施釉前に器面には入念にヘラ磨きし、見込みには印刻花文を描いている。高台内にもヘラ記号様の刻みがある。P1より出土した1・2・5・7・8・10は同時期に遺棄・廃棄された可能性があり、これらの遺物から本竪穴は9世紀後半から10世紀前半頃に廃絶したと思われる。



1. 10YR3/2 (黒褐色土) ローム粒・ブロック (φ2～15mm) を少量、埴土粒・炭化粒 (φ2～8mm) を微量含む。粘性・しまりあり。
2. 10YR3/2 (黒褐色土) ローム粒 (φ2～8mm) を少量、ロームブロック (φ10～30mm)・埴土粒 (φ2～6mm) を微量含む。粘性・しまりあり。S1829 周溝。
3. 10YR3/3 (暗褐色土) ローム粒・ブロック (φ4～30mm) を少量、埴土粒 (φ2～6mm) を微量含む。粘性あり。しまりやや強い。S1829 埴床。

第 65 図 S1829 竪穴建物



写真 46 S1829 遺物出土状況 (南から)



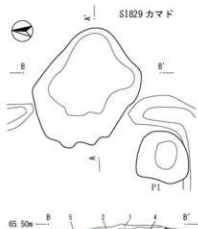
写真 47 S1829 床面検出状況 (南から)



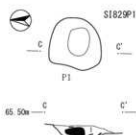
写真 48 S1829 カマド掘り方状況 (西から)



写真 49 S1829P1 遺物出土状況 (東から)

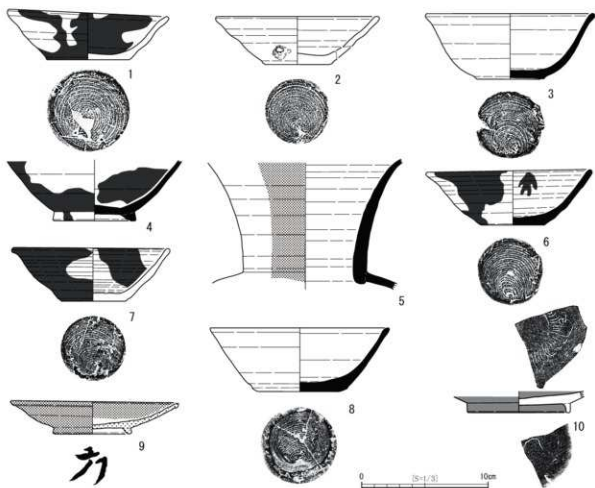


1. 7. 5YR3/1 (極赤灰色土) 焼土粒 ( $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ ) を少量、硬質ローム粒 ( $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ ) ・炭化粒 ( $\phi 0.5 \sim 1\text{mm}$ ) を微量含む。粘性やや弱く、しまりやや強い。
2. 5YR3/3 (暗赤褐色土) 焼土粒・ブロック ( $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ ) を少量、硬質ローム粒 ( $\phi 0.5 \sim 1\text{mm}$ ) ・炭化粒 ( $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ ) を微量含む。粘性弱く、しまりやや強い。
3. 7. 5YR6/8 (橙色土) 焼土主体弱。硬質ローム粒 ( $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ ) ・炭化粒 ( $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ ) を微量含む。粘性を欠き、しまり強い。カマド内底面。
4. 10YR3/3 (暗褐色土) 硬質ローム粒 ( $\phi 0.5 \sim 2\text{mm}$ ) を微量含む。粘性・しまりやや弱い。
5. 10YR4/2 (灰黄褐色土) 硬質ローム粒・ブロック ( $\phi 2 \sim 10\text{mm}$ ) を含み、焼土粒 ( $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ ) を微量含む。粘性弱く、しまり強い。カマド廻り方層。



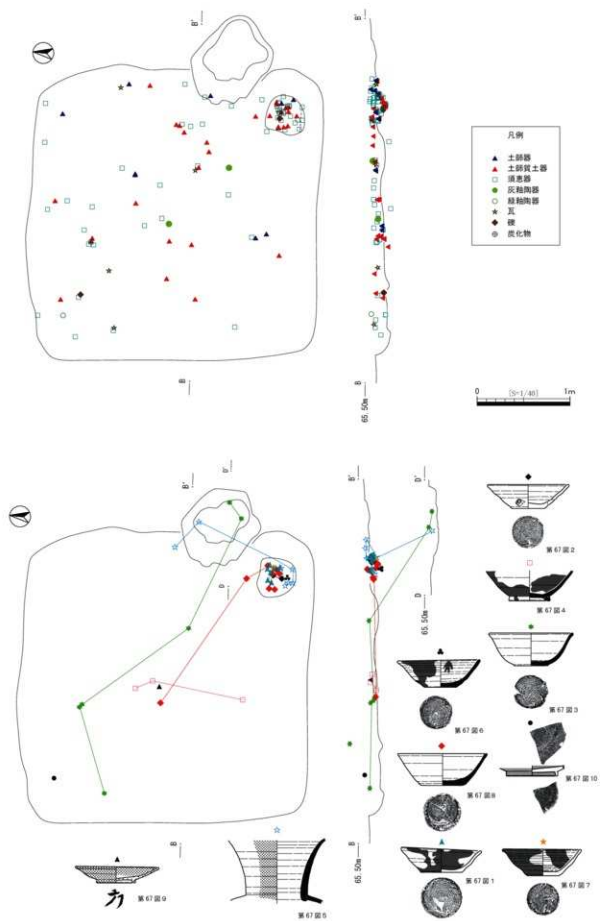
1. 10YR4/1 (黄灰色土) ローム粒 ( $\phi 2 \sim 4\text{mm}$ ) ・焼土粒 ( $\phi 1 \sim 2\text{mm}$ ) を微量、炭化ブロック ( $\phi 10 \sim 30\text{mm}$ ) を少量、遺物・織を多く含む。粘性やや強く、しまりあり。

第 66 図 S1829 カマド・P1



第 67 図 S1829 出土遺物 (1)





第 68 圖 SI829 遺物出土分布図・掲載遺物接合図



第 69 圖 S1829 出土遺物 (2)

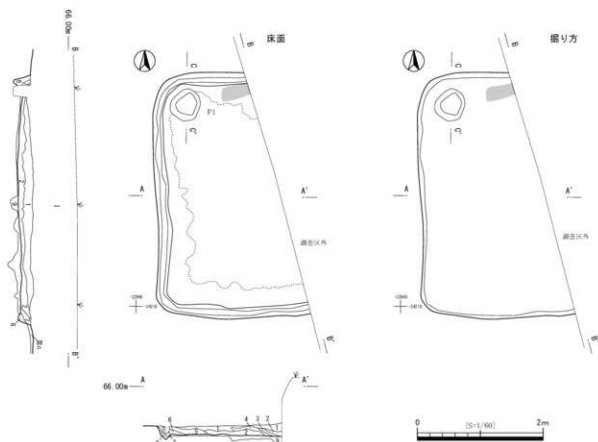
表9 S1829 出土遺物観察表-土器-

掲載番号	種別 器種	出土 位置	口径 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	残量	備考
1	土師質土器 坏	S1829 覆土	12.8 4.0 6.5	平らな底部から、体部は緩やかに内湾して立ち上がる。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	ほぼ完形	内外面：ぶい黄褐色 101R7/4、やや軟らかい。焼成普通。φ1～5mmの粘土塊少量。小砂粒少量。金雲母微量。
2	土師質土器 坏	S1829 覆土	13.0 3.8 5.0	肉厚で平らな底部から、体部は直線的に立ち上がる。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。体部に穿孔あり。	口縁部～ 底部 2/3	内外面：橙色 7.5R7/6、やや軟らかい。焼成普通。φ1～3mmの角礫微量。微砂粒少量。石英微量。
3	酒器 坏	S1829 覆土	(13.4) 5.2 5.2	やや肉厚な底部から、体部は内湾して立ち上がり、口縁部はやや外反する。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	口縁部～ 底部 1/3	外面：淡灰色 51R/3、内面：灰色 517/2、やや堅い。焼成普通。φ1～3mmの角礫微量。微砂粒少量。
4	酒器 高台付埴	S1829 覆土	— (4.7) 6.4	体部は直線的に立ち上がる。高台部は八字状に開く。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、高台貼付。体部内面に煤付着。	体部～ 底部 1/3	外面：灰色 516/1、内面：灰白色 517/2、やや堅い。焼成良好。小砂粒少量。白色微砂粒少量。高台高 0.7cm。
5	酒器 長頸瓶	S1829 覆土	— (10.3) —	胴部から口縁にかけて大きく外反して立ち上がる。	内外面ロクロ回転によるナゲ調整。	胴部	外面：灰白色 517/1、内面：灰色 516/1、やや堅い。焼成良好。φ1～6mmの角礫微量。白色微砂粒少量。金雲母少量。
6	酒器 坏	S1829 覆土	13.4 4.4 5.0	平らな底部から、体部は直線的に立ち上がる。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	完形	外面：淡黄褐色 101R8/3、内面：淡黄色 2.51R/4、やや堅い。焼成普通。φ1～5mmの角礫少量。小砂粒やや多量。内面に煤付着。
7	土師質土器 坏	S1829 覆土	12.5 4.2 5.0	平らな底部から、体部は外面を設立しながら直線的に立ち上がる。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	ほぼ完形	外面：淡黄褐色 101R8/4、内面：灰白色 101R8/2、やや堅い。焼成普通。φ1～7mmの角礫少量。小砂粒やや多量。内外面に煤付着。
8	酒器 坏	S1829 覆土	14.2 5.0 6.6	平らな底部から、体部は直線的に立ち上がる。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	ほぼ完形	外面：淡黄褐色 101R8/3、内面：ぶい黄褐色 101R7/3、やや軟らかい。焼成普通。φ1～6mmの角礫砂片多量。小砂粒やや多量。
9	民輪陶器 皿	S1829 覆土	13.3 2.7 6.2	体部は直線的に立ち上がる。高台部は八字状に開く。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りをし、回転ヘラケズリ。高台貼付。体部外面・体部内面上半部に刷毛塗りによる灰白色の刷毛。	ほぼ完形	内外面：灰色 7.516/1、堅い。焼成良好。φ1～3mmの角礫微量。微砂粒少量。高台高 0.5cm。
10	緑輪陶器 皿	S1829 覆土	— (1.3) (8.0)	直線的に立ち上がる輪高台。	ロクロ調整の後、高台貼付。内外全面に淡緑色の釉。見込みに花文線刻。高台裏に流線刷毛。	体部～ 底部 1/3	外面：灰色 516/1、堅い。焼成良好。胎土緻密。高台高 0.8cm。

SI830 竪穴建物 (第 70 ~ 72 図、表 10、写真 50 ~ 53)

調査区東辺南寄りで見出された。東半部が調査区の外に及んでおり、全体の形状は不詳ながら、確認された規模は西壁で 3.9 m、南壁は 2.5 m を有する方形基調のプランで、確認面から床面までの深さは約 0.2 m、貼床の厚みは約 0.1 m をはかる。北壁・西壁・南壁沿いには、幅 20 cm × 深さ 10 cm ほどの周溝が巡る。床面は周囲より中央付近でやや低く窪むが、全体的に硬化している。付帯施設として、調査した範囲内ではカマドは検出されず、床面の北西隅に径 40 cm × 深さ 10 cm の円形小穴が 1 基確認された。建物の軸は西壁の走行ラインを基準とすると、僧寺中軸線に対して 5° 50' 東偏する。

遺物は覆土下層から床面上にかけて、土師器・土師質土器・須恵器・灰釉陶器・瓦・石器・礫が出土しており、このうち 5 点を図示した (第 72 図)。

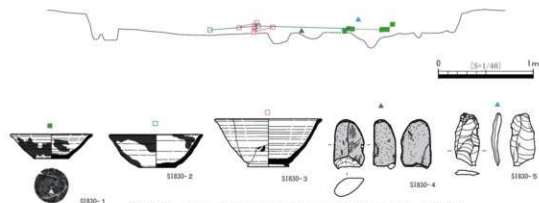
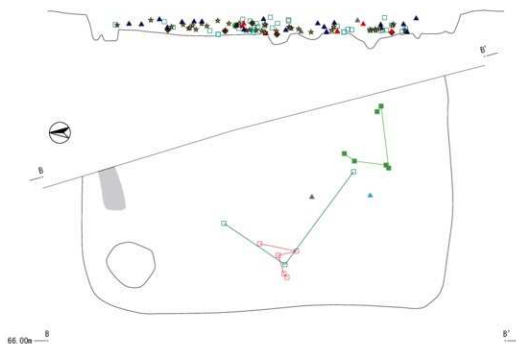
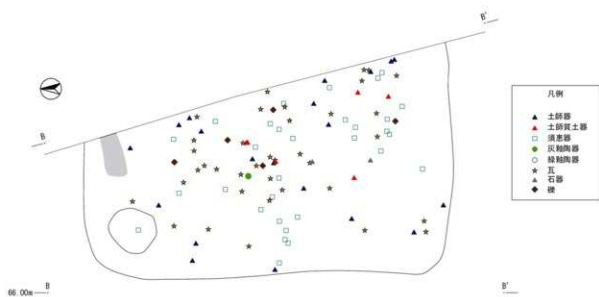


1. 7.SYR2/3 (暗褐色土) ローム粒 (φ2 ~ 6mm) を少量、焼土粒・ブロック (φ1 ~ 15mm) ・炭化粒 (φ2 ~ 6mm) を微量含む、粘性・しまりあり。
2. 7.SYR3/2 (黒褐色土) ローム粒 (φ2 ~ 8mm) を現状に含み、ロームブロック (φ10 ~ 20mm) を少量、焼土粒・炭化粒 (φ2 ~ 6mm) を微量含む、粘性・しまりあり。
3. 5YR3/6 (暗赤褐色土) 焼土粒 (φ1 ~ 8mm) を少量、焼土ブロック (φ10 ~ 20mm) ・炭化粒 (φ1 ~ 6mm) を微量含む、粘性やや弱く、しまりあり。
4. 10YR5/6 (黄褐色土) ロームブロック (φ10 ~ 50mm) をやや多く、焼土粒 (φ1 ~ 4mm) を微量含む、粘性・しまりやや強い。
5. 5YR3/3 (暗赤褐色土) ローム粒・ブロック (φ2 ~ 20mm) を少量、焼土粒 (φ2 ~ 8mm) ・炭化粒 (φ1 ~ 6mm) を微量含む、粘性やや弱く、しまりあり。
6. 10YR3/3 (暗褐色土) ローム粒・ブロック (φ4 ~ 30mm) を少量、炭化粒 (φ2 ~ 4mm) を微量含む、粘性・しまりあり。
7. 10YR3/4 (暗褐色土) ローム粒 (φ1 ~ 6mm) を少量、ロームブロック (φ10 ~ 20mm) を微量含む、粘性やや強く、しまりあり。
8. 10YR4/3 (にがい黄褐色土) ロームブロック (φ10 ~ 30mm) をやや多く、焼土粒 (φ2 ~ 6mm) を微量含む、粘性・しまりやや強い、SI830 周溝。
9. 10YR5/6 (黄褐色土) ツフトローム・ハードローム混合土、焼土粒 (φ1 ~ 4mm) を微量含む、粘性やや強く、しまり強い、SI830 貼床。



- P1
1. 10YR3/2 (黒褐色土) ローム粒・ブロック (φ2 ~ 15mm) を現状に含み、硬質ローム粒 (φ2 ~ 8mm) を少量、焼土粒 (φ2 ~ 6mm) を微量含む、粘性・しまりあり。
  2. 10YR4/3 (にがい黄褐色土) 粘性やや強く、しまりあり。ローム粒 (φ4 ~ 8mm) をやや多く、ロームブロック (φ10 ~ 20mm) を少量含む。

第 70 図 SI830 竪穴建物



第 71 圖 S1830 遺物出土分布圖・掲載遺物分布圖及び接合圖



写真 50 SI830 遺物出土状況 (南から)



写真 51 SI830 床面検出状況 (南から)



写真 52 SI830P1 (西から)

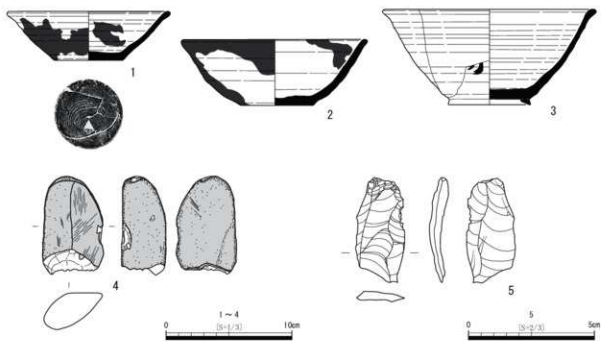


写真 53 SI830 掘り方検出状況 (南から)

表 10 SI830 出土遺物観察表—土器・石器—

掲載番号	種別 器種	出土 位置	口径 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	重量	備考		
1	須恵器 坏	SI830 覆土	13.0 3.9 5.4	肉厚で平らな底部から、体部は直線的に立ち上がる。	ロタロ調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	111g 完形	内外面: 灰色 S5/、やや堅い、焼成普通。 φ1~3mmの角礫少量、白色砂粒少量。 内外面にオリーブ黒色の膠付着。		
2	須恵器 坏	SI830 覆土	13.7 5.3 5.8	肉厚で平らな底部から、体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	ロタロ調整の後、底部は回転糸切りを施す。	111g 完形	外面: 灰白色 S17/2、内面: 浅黄色 S17/3、やや堅い、焼成普通。φ1~3mmの角礫少量、微砂粒少量。		
3	須恵器 高台付埴	SI830 覆土	17.0 7.6 6.6	体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。高台部は低く、八字状に開く。	ロタロ調整の後、底部は回転糸切りをし、回転ヘラケズリ。高台貼付。体部外面に判別不能の墨書あり。	口縁部~ 底部 底部完形	内外面: 浅黄色 S17/3、やや堅い、焼成普通。φ1~3mmの角礫少量、微砂粒少量。高台高0.4cm。		
掲載番号	種別 器種	出土 位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	特徴	石材	備考
4	磨石	SI830 覆土	(7.4)	4.7	2.7	146.4	基部欠損。平滑面に細かい凹痕あり。	砂岩	扁平な自然石を用いた磨石転用品。左側縁に敲打痕あり。
5	剥片	SI830 覆土	4.2	1.9	0.5	3.8	やや縦長な剥片の右側縁に、使用痕と思われる細かい凹痕。	黒曜石	両側縁に規則的な調整を施す。小深凹痕。

1・2は須恵器坏で、ともに体部内外面に煤が付着している。3は高台がとり付く埴で、体部外面に「方」もしくは「万」と判読できそうな墨書の筆払いがある。須恵器はいずれも9世紀後半の東金子窯産の製品であろう。4は砂岩製棒状礫の側縁部に敲打痕が認められる。5は黒曜石製の剥片で、後述する自然科学的分析により小深沢産と判明している。



第 72 図 SI830 出土遺物

## (2) 溝状遺構

今回の調査で溝状遺構は5条確認された。このうち、北側の調査範囲外にものびる3条の溝(SD5・140・143)は昭和56・57年度の第135次調査(滝口ほか1989)で確認している延長部分に相当し、遺構番号もそのまま当時の番号を踏襲している。このうちSD5溝条遺構は、市内を南北に縦貫している東山道武蔵路の東側側溝に該当する。以下、個別の遺構ごとに概要を報告する。

### SD5 溝状遺構 (第73図、写真54)

調査区西側で確認された。第135次調査で検出した隣地の西側側溝(SD139)との間に路面(硬質面)は認められず、後世に削平されて滅失したものである。確認された長さは18.1m、最大幅0.92m、確認面からの掘り込みは0.17～0.5m程度で、使用時の路面からかなり深く掘り込まれていたものと想定される。溝底は均一な深さではなく、所々に掘削時の工具痕と思われる不整形の窪みが並んで検出された。

泉町地区で確認されている東山道武蔵路の四時期区分のうち第1期の側溝で、調査区の西側範囲外であるが本遺構に対応する西側の側溝との幅員は12mを有するものと思われ、走行の軸は僧寺中軸線に対して9°東偏している。遺物は覆土上層から2点の瓦片が出土しているが、遺構の使用時期を特定しうる遺物は確認できなかった。しかし、前述のとおり9世紀中葉頃の廃絶と推定されるSI275堅穴建物には切られており、同時期以前にはSD5は埋没しているものと思われる。

### SD140 溝状遺構 (第75～77図、写真56)

調査区西辺北側より北辺西側で検出された、南北に縦走する溝である。過年度の調査で検出された溝であり、北側・南側ともに調査区外に及んでいる。確認された規模は長さ4.7m、最大幅0.6m、深さ約0.2mである。軸は僧寺中軸線に対して15°24'東偏する。覆土は表土の黒色土と地山のロームブロックが混在したもので、形状から近世以降に掘削された畝痕と想定される。遺物は土師器・須恵器・灰軸陶器・瓦が出土し、このうち2点の須恵器を図示した(第76図)。

### SD143 溝状遺構 (第75～77図、写真56)

SD140と並走する溝である。SD140とともに過年度の調査で検出された溝であり、北側・南側ともに調査区外に及んでいる。確認された規模は長さ6.6m、最大幅0.9m、深さ約0.2mである。軸は僧寺中軸線に対して13°01'東偏する。覆土の様相及び形状が並走するSD140と近似しており、畝痕と想定される。遺物は土師器・須恵器・土師質土器・灰軸陶器・瓦、縄文時代中期の土器(第76図)が出土している。

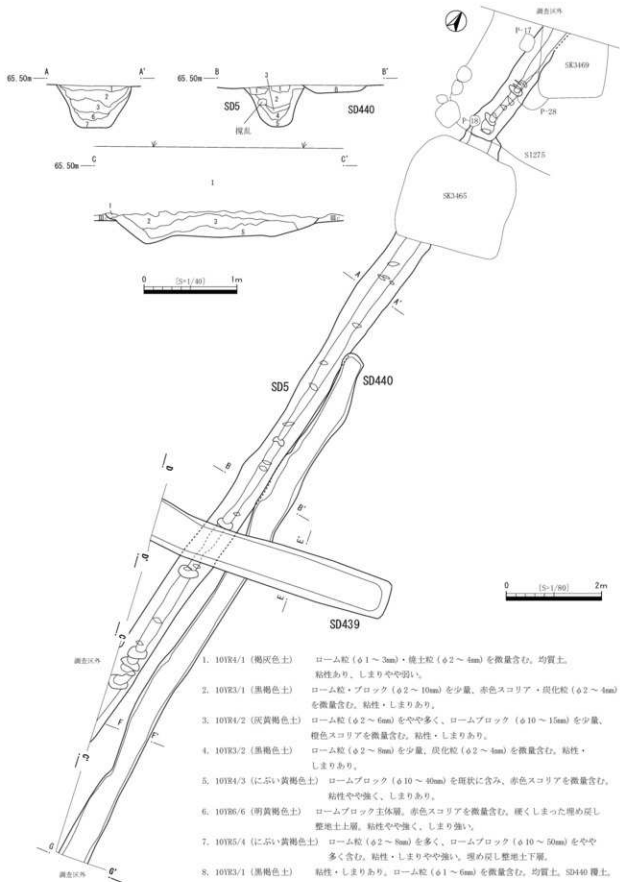
### SD439 溝状遺構 (第73図)

調査区西辺南側で検出された東西に横走する溝である。西側は調査区外に及び、東に向けて上がっていき調査区中央やや南寄りまで途切れる。確認された規模は長さ5.2m、最大幅0.9m、深さ約0.1mである。軸は僧寺中軸線に対して84°49'東偏する。縦走するSD5・440を横断するように重複し、いずれの溝より後出する。覆土は黒褐色土と地山のロームブロックが混在したもので、近世以降に掘削された溝と考えられる。遺物は須恵器・瓦が出土している。

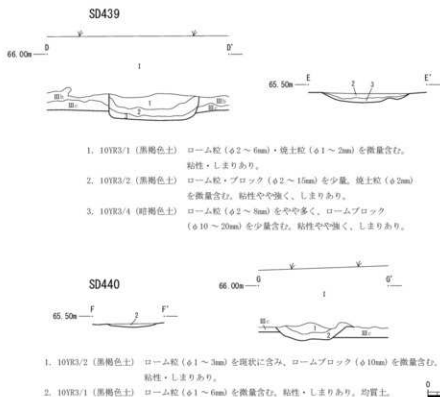
### SD440 溝状遺構 (第73図)

調査区西側で検出された南北に縦走する溝である。南側は調査区外に及び、北に向けて上がっていき調査区中央やや北寄りまで途切れる。確認された規模は長さ12.3m、最大幅0.7m、深さ約0.1mである。SD5と並走するが、軸は僧寺中軸線に対して4°37'東偏し、SD5よりもやや外側に開く。横走り重複するSD439よりも古い。覆土はSD439と近似し、近世以降に掘削された溝と考えられる。遺物は土師器・須恵器・瓦・埴が出土している。





第 73 図 SD5・439・440 溝状遺構



第74図 SD439・440 断面図

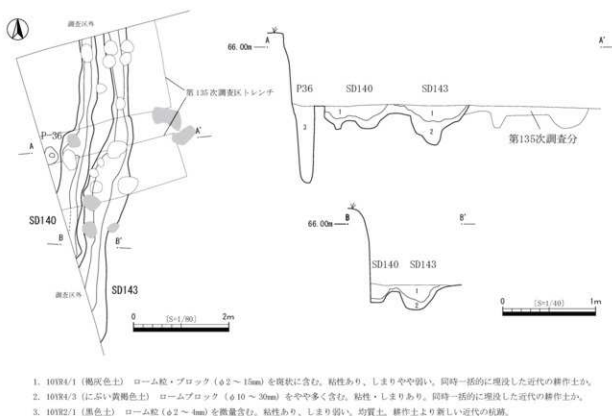




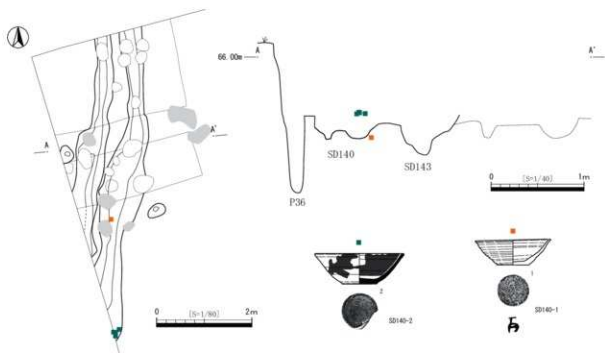
写真 54 SD 5 東山道武蔵路東側側溝断面 (南から)



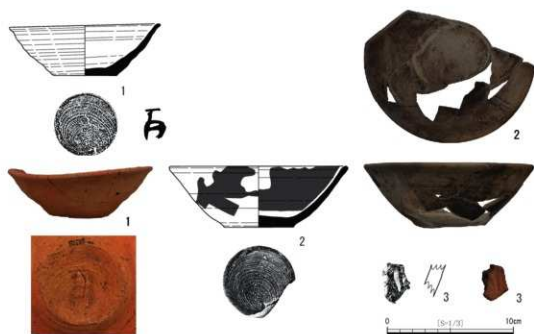
写真 55 SD 5・439・440 溝状遺構全景 (南から)



写真 56 SD140・143 溝状遺構全景 (東から)



第 76 図 SD140・143 掲載遺物出土分布図



第 77 図 SD140・143 出土遺物

表 11 SD140・143 出土遺物観察表

周縁番号	種別 器種	出土 位置	口径 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	残量	備考
1	須恵陶 杯	SD140 覆土	13.0 3.9 5.4	肉厚で平らな底部から、体部はやや内 湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外 反する。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りを し、無調整。底部に何れ不能の遺著あ り。	ほぼ 完形	内外面：褐色 5YR7/4、やや堅い、焼 成普通。φ1～2mmの角礫微量、微砂 粒少量。
2	須恵陶 杯	SD140 覆土	14.1 4.8 5.4	肉厚で平らな底部から、体部は直線的 に立ち上がる。	ロクロ調整の後、底部は回転糸切りを し、無調整。	口縁部～ 底部 底部完形	内外面：暗灰黄色 2.5Y5/2、やや堅い、 焼成普通。微砂粒少量、石英微量。
3	織文土器 深鉢?	SD143 覆土	— (2.0) —	小片のため全体の器形不明。	外面に縦位の比喩文による区画、沈痾 間磨損。内面粗いナゲ調整。	胴部 小片	加曾利E式。外面：赤褐色 5YR4/6、 内面：にぶい赤褐色 5YR4/4、焼成普通、 微砂粒少量、石英・スクリップ微量。

### (3) 土坑・小穴

土坑・小穴は、それぞれ11・31基確認された。このうち規格性のある大型の掘り込みを土坑と命名し、以下に個別の概要を記す。なお、SK3475土坑からは人骨片が出土し、人類学的分析結果を第3節にて詳述する。

#### SK3465 土坑 (第78図、写真57)

調査区北側で検出された土坑である。平面形は隅丸方形を示し、規模は長径2.3m、短径2.2m、深さは約0.3mである。主軸は僧寺中軸線に対して5°22′西偏する。重複するSD5溝状遺構より後出する。遺物は土師器・須恵器・土師質土器・瓦・埴が出土している。

#### SK3466 土坑 (第78図、写真58・59)

調査区南側で検出された土坑である。平面形は東西に長い隅丸方形を示し、規模は長径2.4m、短径1.5m、深さは約0.3mである。主軸は僧寺中軸線に対して88°05′東偏する。遺物は土師質土器・須恵器・灰軸陶器・瓦が出土している。

#### SK3467 土坑 (第78図、写真60)

調査区北辺東寄りで検出された土坑である。北側が調査区外に及び、規模は長径1.7m、短径0.5m以上、深さは約0.3mである。主軸は僧寺中軸線に対して82°07′東偏する。重複するSI274竪穴建物より後出する。遺物は土師器・須恵器・土師質土器・灰軸陶器・瓦が出土している。

#### SK3468 土坑 (第79・81図、写真61・62)

調査区中央付近で検出された土坑である。平面形は南北に長い隅丸方形を示し、規模は長径2.2m、短径1.6m以上、深さは約0.2mである。主軸は僧寺中軸線に対して3°02′東偏する。SI828竪穴建物の内側に収まるように重複し、SI828より後出する。遺物は土師器・須恵器・土師質土器・灰軸陶器・瓦・石製品が出土している(第81図)。

#### SK3469 土坑 (第79・82図、写真63・64)

調査区北辺中央付近で検出された土坑である。北側は調査区外に及び、平面形は南北に長い隅丸方形が想定され、確認された規模は長径1.5m以上、短径1.42m、深さは約0.6mである。主軸は僧寺中軸線に対して21°37′西偏する。SD5溝状遺構、SI274・275竪穴建物と重複し、いずれの遺構より後出する。遺物は土師器・須恵器・土師質土器・灰軸陶器・緑軸陶器・瓦・石製品及び、流れ込みと思われる縄文時代中期の土器が出土している(第82図)。

#### SK3470 土坑 (第79・82図、写真65)

調査区東辺南側で検出された土坑である。東側は調査区外に及び、平面形は東西に長い隅丸方形が想定され、確認された規模は長径1.6m以上、短径1.4m、深さは約0.2mである。主軸は僧寺中軸線に対して90°12′東偏する。遺物は土師器・須恵器・灰軸陶器・瓦、15世紀の天目茶碗が出土している(第82図)。

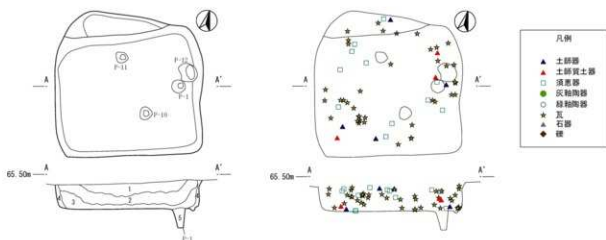
#### SK3471 土坑 (第80図、写真66・67)

調査区南側で検出された土坑である。平面形は東西に長い隅丸方形を示し、規模は長径1.7m、短径1.2m、深さは約0.2mである。主軸は僧寺中軸線に対して83°54′東偏する。重複するSK3472土坑より後出する。遺物は須恵器・土師質土器・瓦が出土している。

#### SK3472 土坑 (第80図、写真66・67)

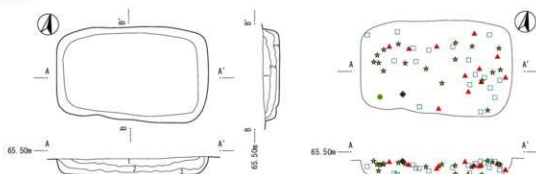
調査区南側で検出された。平面形は南北に長い隅丸方形で、規模は長径1.4m以上、短径1.2m、深さは約0.2mである。主軸は僧寺中軸線に対して0°41′西偏する。重複するSK3471土坑より古い。遺物は出土していない。

## SK3465



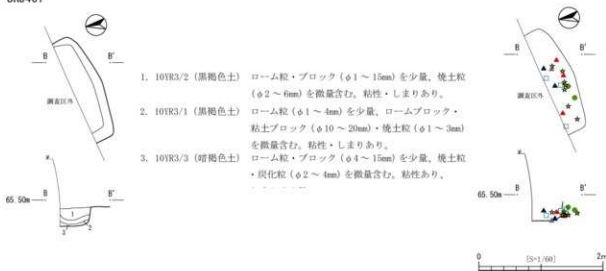
1. 10YR3/2 (黒褐色土) ローム粒・ブロック(φ2～20mm)を少量含む。粘性あり、しまりやや弱い。
2. 10YR3/3 (暗褐色土) ローム粒(φ2～8mm)を少量、ロームブロック(φ10～50mm)をやや多く含む。粘性あり、しまりやや弱い。
3. 10YR3/2 (黒褐色土) ローム粒・ブロック(φ1～30mm)を少量含む。粘性・しまりあり。
4. 10YR4/3 (にがい黄褐色土) ロームブロック(φ10～40mm)をやや多く含む。粘性やや強く、しまりあり。
5. 10YR3/1 (黒褐色土) ローム粒(φ1～4mm)・炭化粒(φ2～4mm)を微量含む。粘性・しまりあり。

## SK3466



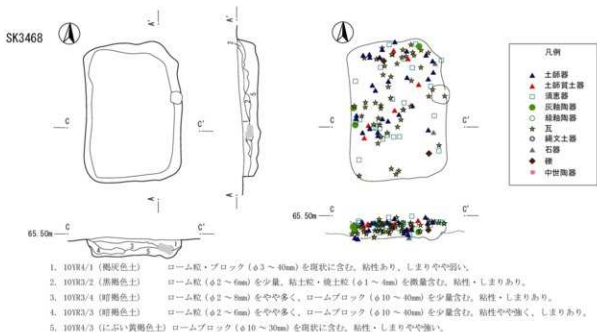
1. 10YR3/3 (暗褐色土) ローム粒(φ2～6mm)をやや多く、ロームブロック(φ10～40mm)を少量含む。粘性やや強く、しまりあり。
2. 10YR3/4 (暗褐色土) ローム粒・ブロック(φ6～30mm)をやや多く、焼土粒・炭化粒(φ2～4mm)を微量含む。粘性やや強く、しまりあり。
3. 10YR3/2 (黒褐色土) ローム粒・ブロック(φ2～15mm)を少量含む。粘性・しまりあり。

## SK3467



1. 10YR3/2 (黒褐色土) ローム粒・ブロック(φ1～15mm)を少量、焼土粒(φ2～6mm)を微量含む。粘性・しまりあり。
2. 10YR3/1 (黒褐色土) ローム粒(φ1～4mm)を少量、ロームブロック・粘土ブロック(φ10～20mm)・焼土粒(φ1～3mm)を微量含む。粘性・しまりあり。
3. 10YR3/3 (暗褐色土) ローム粒・ブロック(φ4～15mm)を少量、焼土粒・炭化粒(φ2～4mm)を微量含む。粘性あり。

第78図 SK3465・3466・3467土坑



第 79 図 SK3468・3469・3470 土坑

## SK3471・3472



1. 10YR4/1 (褐色色土) ローム粒・焼土粒 ( $\phi 1 \sim 6\text{mm}$ ) を少量、ロームブロック ( $\phi 10 \sim 15\text{mm}$ ) を微量含む。粘性・しまりあり。
2. 10YR3/1 (黒褐色土) ローム粒・ブロック ( $\phi 4 \sim 15\text{mm}$ ) を現状に含み、焼土粒 ( $\phi 2 \sim 4\text{mm}$ ) を微量含む。粘性・しまりあり。
3. 10YR3/2 (黒褐色土) ローム粒 ( $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ )、焼土粒・ブロック ( $\phi 1 \sim 10\text{mm}$ ) を微量含む。均質土。粘性・しまりあり。
4. 10YR3/3 (暗褐色土) ローム粒・ブロック ( $\phi 2 \sim 20\text{mm}$ ) を現状に含み、焼土粒 ( $\phi 1 \sim 4\text{mm}$ ) を微量含む。粘性やや強く、しまりあり。



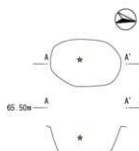
## SK3473



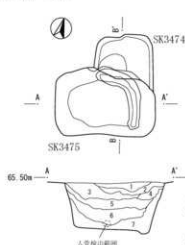
1. 10YR5/6 (黄褐色土)
2. 10YR4/3 (にぶい黄褐色土)

ハードローム・ソフトロームブロック ( $\phi 10 \sim 60\text{mm}$ ) 混合土。黒褐色シルト粒・ブロック ( $\phi 6 \sim 30\text{mm}$ ) を少量含む。粘性あり。しまりやや弱い。

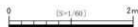
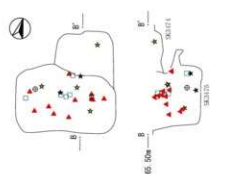
ロームブロック ( $\phi 10 \sim 30\text{mm}$ ) をやや多く、黒褐色シルト粒・ブロック ( $\phi 4 \sim 15\text{mm}$ ) を少量含む。粘性やや強く、しまりやや弱い。



## SK3474・3475



1. 10YR3/3 (暗褐色土) ローム粒・ブロック ( $\phi 2 \sim 20\text{mm}$ ) をやや多く含む。粘性やや強く、しまりあり。
2. 10YR3/2 (黒褐色土) ローム粒 ( $\phi 2 \sim 6\text{mm}$ ) を少量、ロームブロック ( $\phi 10 \sim 20\text{mm}$ ) を微量含む。粘性やや強く、しまりあり。
3. 10YR3/4 (暗褐色土) ローム粒 ( $\phi 2 \sim 8\text{mm}$ ) を少量、ロームブロック ( $\phi 10 \sim 30\text{mm}$ ) をやや多く含む。粘性やや強く、しまりあり。
4. 10YR4/3 (にぶい黄褐色土) ロームブロック ( $\phi 10 \sim 60\text{mm}$ ) を多く含む。粘性やや強く、しまりあり。
5. 10YR3/3 (暗褐色土) ローム粒 ( $\phi 2 \sim 6\text{mm}$ ) を少量、ロームブロック ( $\phi 10 \sim 20\text{mm}$ ) を微量含む。粘性強く、しまりやや強い。
6. 10YR3/4 (暗褐色土) ローム粒・ブロック ( $\phi 4 \sim 40\text{mm}$ ) をやや多く含む。粘性強く、しまりやや強い。人骨出土層。
7. 10YR5/4 (にぶい黄褐色土) ロームブロック ( $\phi 10 \sim 60\text{mm}$ ) を多く含む。粘性・しまり強い。
8. 10YR4/1 (褐色色土) ローム粒 ( $\phi 2 \sim 4\text{mm}$ ) を少量、焼土粒 ( $\phi 2 \sim 3\text{mm}$ ) を微量含む。粘性・しまりあり。
9. 10YR3/2 (黒褐色土) ローム粒 ( $\phi 2 \sim 8\text{mm}$ ) を少量含む。均質土。粘性やや強く、しまりあり。



第 80 図 SK3471・3472・3473・3474・3475 土坑





写真 57 SK3465 完掘状況 (南から)



写真 58 SK3466 土層断面 (南東から)



写真 59 SK3466 完掘状況 (南から)



写真 60 SK3467 土層断面 (南から)



写真 61 SK3468 土層断面 (東から)



写真 62 SK3468 完掘状況 (東から)



写真 63 SK3469 土層断面 (南から)



写真 64 SK3469 完掘状況 (北から)



写真 65 SK3470 完掘状況 (南から)



写真 66 SK3471・3472 土層断面 (南東から)



写真 67 SK3471・3472 完掘状況 (北から)



写真 68 SK3473 土層断面 (東から)



写真 69 SK3473 完掘状況 (東から)



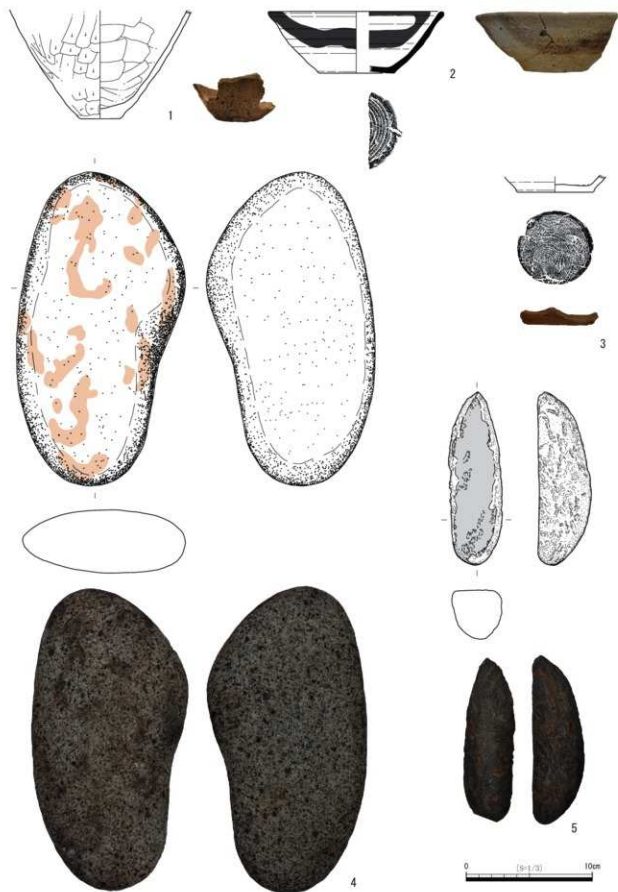
写真 70 SK3474・3475 土層断面 (東から)



写真 71 SK3475 人骨出土状況 (南東から)



写真 72 SK3474・3475 完掘状況 (南から)



第 81 图 SK3468 出土遺物

SK3473 土坑 (第 80 図、写真 68・69)

調査区北側で検出された土坑である。平面形は南北に長い楕円形を示し、規模は長径 1.1 m、短径 0.7 m、深さは約 0.4 m である。主軸は僧寺中軸線に対して 2° 49′ 西偏する。SI274・275 竪穴建物・P 2 と重複し、P 2 より古く、SI274・275 より後出する。遺物は瓦が 1 点出土している。

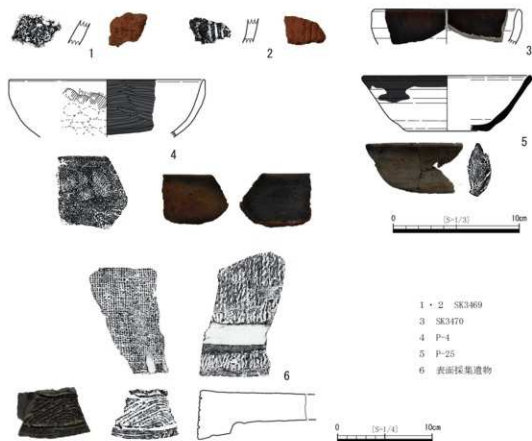
SK3474 土坑 (第 80 図、写真 70・72)

調査区北側東寄りで検出された土坑である。平面形は南北に長い隅丸方形が想定され、規模は長径 0.9 m 以上、短径 0.9 m、深さは約 0.2 m である。主軸は僧寺中軸線に対して 10° 40′ 西偏する。重複する SK3475 土坑より古い。遺物は須恵器・瓦及び、流れ込みと思われる縄文時代の土器が出土している。

SK3475 土坑 (第 80 図、写真 71・72)

調査区北側東寄りで検出された土坑である。平面形は東西に長い隅丸方形を示し、規模は長径 1.6 m、短径 1.1 m、深さは約 0.8 m である。主軸は僧寺中軸線に対して 81° 15′ 東偏する。覆土下層から人骨が出土し、全身骨がほぼ風化していたが、上顎骨・下顎骨及び歯は良好な状態を保っていた。当該遺構に伴う被葬者と考えられ、調査区内に展開する土坑群が土坑墓である可能性を示唆している。重複する SK3474 土坑より後出する。遺物は土師質土器・須恵器・瓦・漆剥片が出土している。

このほか、36 本検出された小穴から土師器・須恵器・灰輪陶器・瓦・鉄滓などが出土し、表土からは土師器・須恵器・宇瓦などを採取している (第 82 図)。



第 82 図 SK3469・3470、P-4・25、表採遺物

SK3468 表 12 SK3468・3469・3470、P-4・25、表採 出土遺物観察表―土器・石器・石製品・宇瓦―

順載番号	種別 器種	出土 位置	口径 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	残量	備考
1	土師器 壺	SK3468 覆土	— (8.6) 3.0	平らな底部から、胴部はやや内湾気味に立ち上がる。	底部ヘラケズリ。胴部外面ヘラケズリ。胴部内面ヘラナダ。	胴部～ 底部 底部完形	外面：にぶい黄褐色 101R5/3、内面：灰黄褐色 101R4/2、やや粗い。焼成普通。小砂粒少量、 $\phi 1 \sim 2$ mmの角礫・石英微量。
2	須恵器 坏	SK3468 覆土	14.0 4.9 6.0	薄い底部から、体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	口縁部～ 底部 1/2	外面：灰白色 2.519/2、やや粗い。焼成普通。小砂粒少量、 $\phi 1 \sim 2$ mmの白色微塵量。内外面に打明肌。
3	須恵器 坏	SK3468 覆土	— (1.3) 6.0	平らな底部から、体部は直線的に立ち上がる。	口縁調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	底部～ 底部完形	内外面：明褐色 7.51R5/8、やや粗い。焼成普通。微砂粒少量、 $\phi 1$ mm程度の白色微塵量。

順載番号	種別 器種	出土 位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	特徴	石材	備考
4	台石	SK3468 覆土	25.9	13.0	5.0	2,270.0	表面両面に平坦面あり。	閃緑岩	扁平な自然石を利用した台石。
5	砥石	SK3468 覆土	13.8	4.1	4.1	339.3	平滑な砥面1面あり。砥状粗がみられる。	ホルンブ ン種状の自然石を用い、研磨 ユルス によって砥面を作出。	

SK3469

順載番号	種別 器種	出土 位置	口径 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	残量	備考
1	深鉢?	SK3469 覆土	— (1.7) —	小片のため全体の器形不明。	外面に単座 1R 縄文を斜位に回転施文。内面粗いナダ調整。	胴部 小片	中期?外面：明赤褐色 5YR5/6、内面：にぶい橙色 7.5YR6/4、焼成普通。長石粒やや多量。砂粒少量。石英・スクリア微量。
2	深鉢?	SK3469 覆土	— (1.8) —	小片のため全体の器形不明。	外面に前位の沈隆文による区画。沈隆間磨消。内面粗いナダ調整。	胴部 小片	中期加曾利E。外面：赤褐色 5YR5/6、内面：橙色 7.5YR7/6、焼成普通。微砂粒少量、 $\phi 1 \sim 2$ mmの角礫・石英・スクリア微量。

SK3470

順載番号	種別 器種	出土 位置	口径 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	残量	備考
3	鉄袖陶器 天目茶碗	SK3470 覆土	(12.0) (2.7) —	体部はやや内湾気味。口縁部は直線的に立ち上がる。	内外面に黒色～暗褐色に発色する黒天目粒を薄く施す。	口縁部～ 体部 小片	古瀬戸産田原様式（15世紀第2四半期頃）。断面：灰白色 2.51R/1、硬質。焼成良好。白色・黒色微砂粒微量。

P-4・P-25

順載番号	種別 器種	出土 位置	口径 器高 底径 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	残量	備考
4	土師器 埴	P-25 覆土	(15.6) (4.6) —	体部は内湾気味に立ち上がる。	体部外面上端から下端にかけてヘラケズリの後、胴部下指頭凹調整。内面全体コホレマギキの後、内黒処理。	口縁部～ 体部 小片	外面：褐色 7.5YR3/3、内面：黒色 2.52/1、やや粗い。焼成普通。白色微砂粒少量、 $\phi 1 \sim 2$ mmの角礫微量。
5	須恵器 坏	P-4 SK3468 覆土	(13.5) 4.4 (6.4)	平らな底部から、体部は直線的に立ち上がる。	口縁調整の後、底部は回転糸切りをし、無調整。	口縁部～ 底部 1/4	外面：灰黄色 2.517/2、内面：灰白色 2.517/1、やや粗い。焼成普通。小砂粒少量、 $\phi 1 \sim 5$ mmの角礫微量。

表面採集

順載番号	出土 位置	上服弧幅 下服弧幅 弧深 (cm)	厚さ (cm)	内区		外区		脇区		文様 深さ (cm)	全長 (cm)	備考		
				厚さ (cm)	文様	上		下					幅 (cm)	文様
						厚さ (cm)	文様	厚さ (cm)	文様					
6	表土	(3.8) (7.5) —	5.0	3.2	重弧文	0.7	素文	1.1	素文	—	0.2	(13.6)	灰瓦凸面に瓦当部貼り付け。曲線彫。粗い。焼成普通。凹面布目(20×20)、凸面織目叩きの後、接合部コホナダ。黄灰色 2.5Y4/1、 $\Phi 1 \sim 4$ mmの角礫少量、白色小砂粒やや多量。	

## (7) 武蔵国分寺跡第761次調査

所在地	西元町3丁目1985番	武蔵国分寺跡 (遺跡№.10・19)
令和2年9月29日付文化財保護法第93条第1項届出 (国教教ふ収第505号)		
調査原因	宅地造成・分譲住宅	調査種別 確認調査
調査費用	国庫補助金	調査担当: 桂・平塚
調査期間	令和2年10月19日～10月20日(実働2日)	
調査面積	70.5㎡	遺物箱数 1箱
検出遺構	堅穴建物2(プラン確認まで)	
主な遺物	縄文時代の土器、奈良・平安時代の瓦・土器	

## 武蔵国分寺跡第762次調査

調査原因	集合住宅	調査種別	発掘調査
調査費用	原因者	調査担当: 平塚・有吉(トキオ文化財)	藤代(トキオ文化財)
調査期間	令和2年12月1日～令和3年1月16日 (実働32日)		
調査面積	364.7㎡	遺物箱数	13箱
検出遺構	堅穴建物12(S1831～842)、土坑20(SK3476～3490、3492、3495、349J、3493J、3494J)、小穴18		
主な遺物	縄文時代の土器・石器、奈良・平安時代の瓦・土器・鉄製品・石製品		

### 1. 調査の目的と経緯

#### (1) 法93条に基づく届出

面積3,420.41㎡の敷地に対して宅地造成、22棟からなる分譲住宅建設、敷地南西の提供公園の造成、そしてガス・水道・電気等のインフラ工事を行う計画で、法93条に基づく届出が提出された。当該地は埋蔵文化財包蔵地の武蔵国分寺跡(国分寺市№.10・19遺跡)の範囲に該当し、僧寺七重塔東側近傍の寺院地区画内に所在しており、これまでも周辺では各種開発に伴う発掘調査で古代の武蔵国分寺跡に関わる遺構・遺物が検出されているため、市教委は周辺での過去の調査履歴と今次の開発計画を照らしつつ措置に対する検討を行った。その結果、工事の掘削深度が深くなることが予定されている、敷地中央部を東西に横切る引き込み道路下部の新設下水管敷設予定範囲(GL-1.46～1.92m)と、各住戸に付帯する雨水浸透トレンチや提供公園の防火水槽(GL-3.0m)の一部に対して遺物の存否・分布密度を探るための確認調査を要すると判断し、その旨を明記した埋蔵文化財協議書を10月2日付けで事業者へ返送すると同時に、都教委宛てにも本届出書を連携した。その後、同月16日付けで都教委から事業者・市教委に対して確認調査実施の協力と、工事施工により遺構等埋蔵文化財の保存に影響がある場合は、工事着手する前に発掘調査を実施するよう通知が寄せられた(2教地管理第2498号)。なお、本工事に係る事業は1,000㎡を超える大型開発に該当しており、10月21日付けで、別途、国分寺市まちづくり条例に基づく関係各課事前協議書の手続きも踏まえている(国教教ふ収第577号)。



第83図 調査地点位置図(MK761・762)

#### (2) 確認調査(武蔵国分寺跡第761次調査)

上記の手続きと並行しながら、市教委は事業者と確認調査の実施に向けた協議を進め、現地は前用途物件の構造物撤去工事がすでに終了して更地の状況になっていたため、10月9日に国分寺市遺跡調査会に対して確認調査実施の指示簿を发出し、19～23日の両日に確認調査の予定を計画した。その対象範囲は第84図に示したとおり、1・5・6・7・18・21・22号棟および提供公園予定地内の各浸透トレンチを対象に幅1.0m×長さ4.0mの調査区を8箇所(A～D・F～Iトレンチ)、新設下水道管敷設範囲に幅1.0m×長さ30mの調査区を1箇所(Eトレンチ)、計9箇所(面積62㎡)の調査区を設け、公費にて対応することとした(武蔵国分寺跡 第761次調査)。

確認調査は19日より着手したが、敷地内は畑の耕作土による削平が広範囲に及んでおり、重機を用いて表土を取り除くと、その直下でソフトローム層が検出される調査区が相次いだ。表土の堆積厚は、敷地北側のA～Dトレンチでは約40～55cm、南側では約80～110cmを有し、ローム層の検出面における勾配は、北側に対して南側で低く傾斜している状況が判明した。なお、Eトレン



第 84 図 確認調査トレンチ (第 761 次) 設定状況と本調査 (第 762 次) 後の工事立会箇所



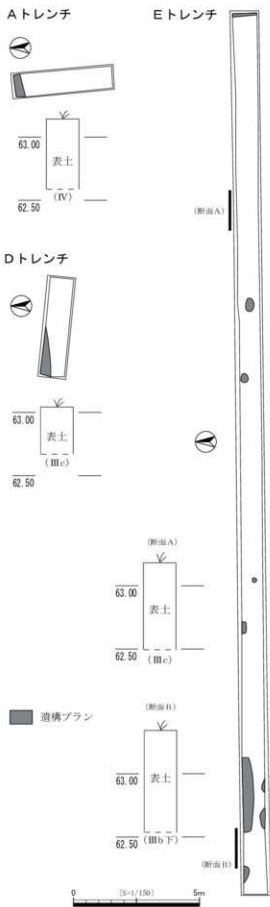


写真 73 Aトレンチ (南から)



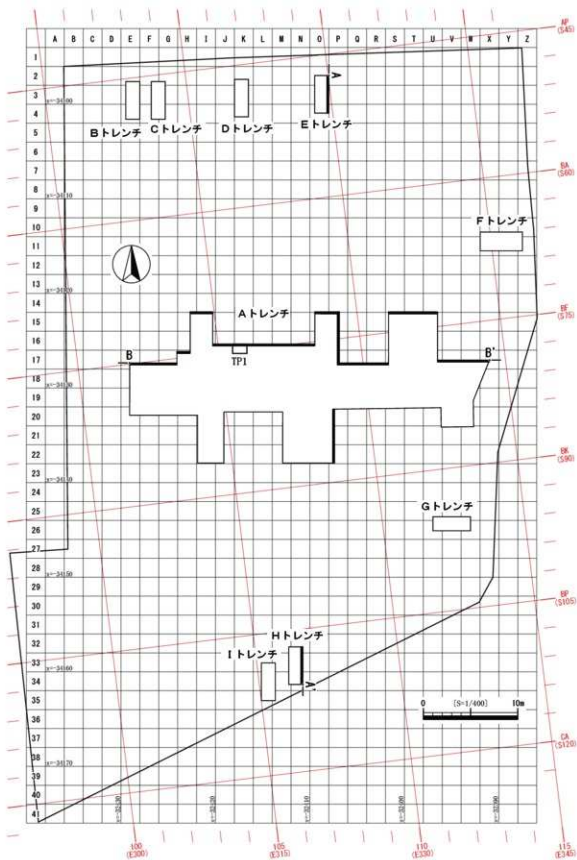
写真 74 Dトレンチ (西から)



写真 75 Eトレンチ (東から)

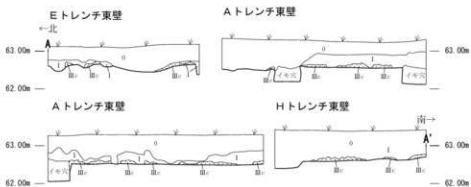
第 85 図 確認調査結果 (A・D・Eトレンチ)



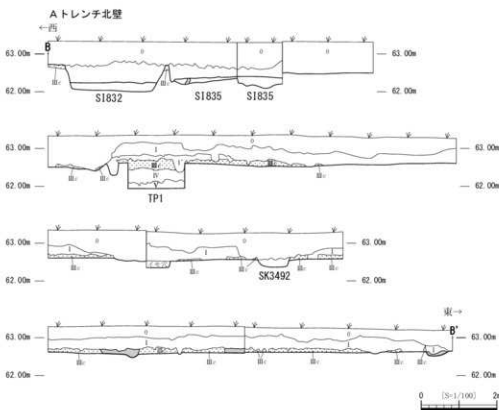


第 86 図 第 762 次調査（本調査）トレンチ設定状況

### 南北土層断面図



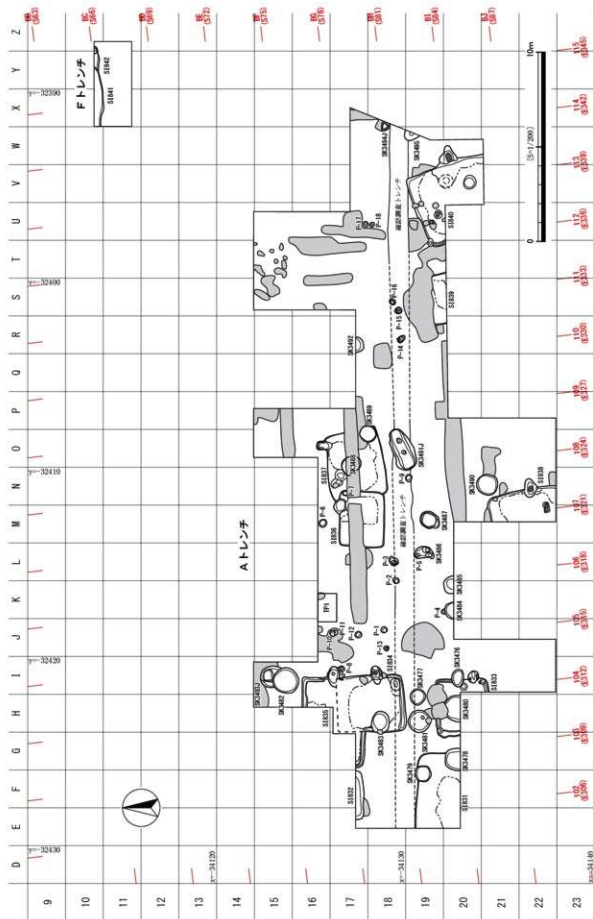
### 東西土層断面図



第 87 図 調査区内の土層堆積状況

チでは地表下約 80cm の深度でローム層が現れるが、ロームに対する黒色土のプランとして堅穴建物 1 棟、土坑 7 基、不明遺構 1 基が確認されたほか、A・D トレンチでも古代の遺構プランがそれぞれ 1 基ずつ把握された（第 85 図）。

そのため、翌 20 日に事業者と市教委間で、以降の埋蔵文化財の取扱いにかかる再協議を行い、確認調査で遺構が把握された範囲を中心に本調査実施範囲を確定し、事業者負担による本調査へ移行する手続きを進めることにした。そして、11 月 30 日付けで事業者・市教委・調査請負会社（共和開発株式会社）の 3 者間で「興和地所株式会社宅地造成・分譲住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を締結し、12 月 1 日から翌年 1 月 29 日までに現地の発掘調査を実施することとした。なお、調査次数は確認調査と区別して「武蔵国分寺跡第 762 次調査」とし、図面・写真・遺物等の管理をはかることにした。調査担当者は法 99 条に基づき市教委の職員を配置し、発掘調査・出土品等整理作業・報告書作成業務



第 88 図 第 762 次調査遺構輸出状況全体図

を含めた全般的な支援業務を共同開発（令和3年1月1日からトキオ文化財株式会社へ社名変更）が担う調査態様として臨んだ。

### (3) 本調査（武蔵国分寺跡第762次調査）

本調査の成果は、別冊の報告書『武蔵国分寺跡（第762次調査）－興和地所株式会社 宅地造成・分譲住宅建設工事に伴う埋蔵文化財調査－』にて触れているので、以下、その概要のみを記す。

第86図に示したごとくA～Iトレンチまでの9箇所、計約364㎡を対象に調査を行い、平安時代以降の堅穴建物12棟（SI831～842）、土坑17基（SK3476～3490・3492・3495）、ピット18基（P-1～18）、同一確認面上で縄文時代の所産と思しき土坑3基（SK3491J・SK3492J・SK3494J）が発見された。このうち古代の堅穴建物は、9世紀末～10世紀第1四半期、10世紀末～11世紀後半のおおよそ2時期に廃絶したもののばかりで、前者は武蔵国分寺最終修造期、後者は武蔵国分寺変遷第三期（衰退期）に関わる建物と比定された（同書参照）。なお、検出された縄文時代の土坑には陥し穴状の土坑があり、狩猟の場として土地利用されていたことが考えられる。

国分寺の七重塔は承和2年（835）の火災で焼失し、その10年後の承和12年に前男舎郡大領壬生吉志福正によって再建され、さらに元慶2年に関東諸国を襲った地震でも大きな被害を受けたことが知られている。国分寺の創建期当初は、金堂・講堂・塔など主要な堂舎の近くに堅穴建物はまったく分布し

ていないが、塔からわずかに北東へ約130m離れた本地点一帯では、元慶地震の直後に多くの建物が占地している様相が明らかとなった。国分寺が造営されたばかりの天平年間と平安時代中頃では、寺院をとりまく景観が大きく変化しているが、こうした現象がなぜ生じているのか直接的な要因は必ずしも明確ではなく、今後の課題といえよう。



第89図 西元町万葉公園の遺跡案内板



写真76 西元町万葉公園

### (4) 本調査終了後の現状

本調査終了後ただちに事業者へ用地を引き渡し、造成工事が着手された。その折、前述のとおり事業地の南西隅に、国分寺まちづくり条例に基づく提供公園が設置され、市建設環境部緑と建築課では、国史跡地に近い立地特性を踏まえ、今後の発掘調査成果と万葉集東歌および万葉歌に因んだ植物を植栽し、「西元町万葉公園」として令和3年12月に供用を開始した。

開発に伴う緊急発掘調査では、調査終了後に遺跡は破壊され、現地には何も残らないケースが多いなか、この度、事業者の多大なる御理解と御協力を得ることで、遺跡に関わるモニュメントを設置できたことに対し、深く感謝を申し上げる次第である。

## (8) 花沢西遺跡第26次調査

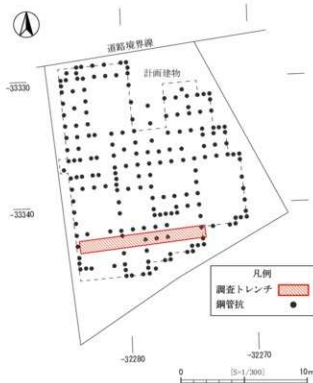
所在地	南町3丁目26-24	花沢西遺跡(遺跡No.8)
令和2年7月17日付文化財保護法第93条第1項届出 (国教教ふ収第275号)		
調査原因	集合住宅	調査種別 確認調査
調査費用	国家補助等	調査担当: 平塚・石森(テイ ケイトレード)
調査期間	令和2年8月4日～8月5日(実働2日)	
調査面積	10㎡	遺物箱数 なし
検出遺構	なし	
主な遺物	なし	



第90図 調査地点位置図 (K8-26)

### 1. 調査の経緯と目的

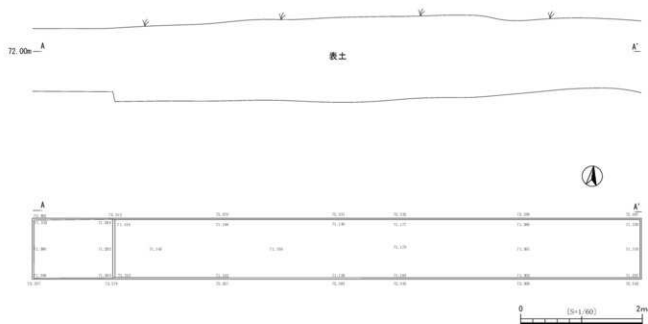
調査地点は JR 中央本線国分寺駅の南西側で、野川左岸の武蔵野段丘面上に立地し、現況の標高は 72.5 m をはかる。南西側に低く傾斜する面積 282.69 ㎡ の敷地内に、既存の住宅を解体後、建築面積 163.13 ㎡ の 2 階建て集合住宅 1 棟を建設する内容の計画で、法 93 条に基づく届出が提出された。事業者が事前に実施したスウェーデン式サウンディング試験に基づく地盤調査によれば、現況地表面より約 7.0 m 下位で砂礫層に到達するが、建物の基礎工事には鋼管杭の打設を伴い、当該砂礫層より上位の地盤中で摩擦力による支持で施工する内容であった。そこで、地形がやや低く傾斜しはじめる敷地南縁部を中心に、幅 1.0 m × 長さ 10.0 m の東西トレンチを設定して調査に臨むことにした。(第 91 図)



第91図 調査区配置図 (K8-26)

### 2. 発見された遺構と遺物

地表から約 1.2 ～ 1.3 m まで盛土が堆積し、当該面から検土杖を用いて下層の状況を探ったところ、さらに 0.5 ～ 0.8 m の深度まで盛土の堆積が続くことが予測された。そのため、トレンチ範囲内からは遺構・遺物ともに確認されなかったことを受けて、調査を終了することとした。



第 92 図 花沢西遺跡第 26 次調査全体図（上段：北壁土層堆積状況、下段：平面図）



写真 77 土層断面図実測風景（南東から）



写真 78 調査区北壁土層堆積状況（南から）

## (9) 殿ヶ谷戸遺跡第18次調査

所在地	南町2丁目9-1	殿ヶ谷戸遺跡 (遺跡No.21)
令和2年8月25日付文化財保護法第93条第1項届出 (国教教ふ収第376号)		
調査原因	分譲住宅	調査種別 確認調査
調査費用	国庫補助等	調査担当: 桂・平塚
調査期間	令和2年9月10日～9月15日 (実働4日)	
調査面積	8.21㎡	遺物箱数 1箱
検出遺構	なし	
主な遺物	縄文時代の土器	

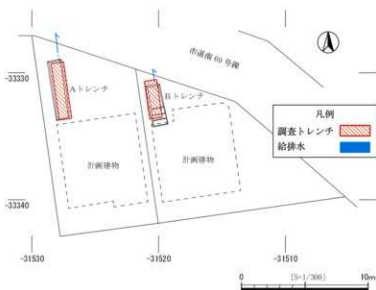


第93図 調査地点位置図 (K21-18)

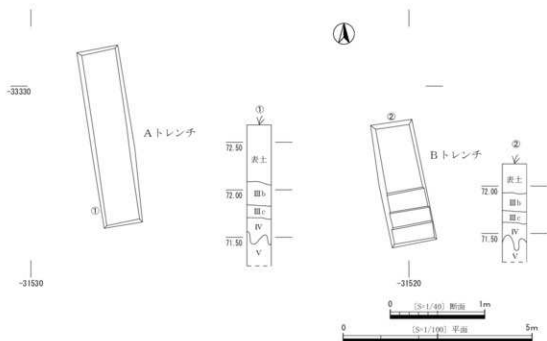
### 1. 調査の経緯と目的

調査地点は JR 中央本線国分寺駅の南東側で、国分寺崖線を北西側に大きく開析する本多谷南岸の武蔵野段丘面上に立地し、現況の標高は約 72.0 m をはかる。敷地に接する道路を挟んで北側の区画では、平成 25 年度に個人住宅建設に先駆けて本調査 (第 14 次調査) を実施し、遺構は未検出ながらも III b 層中から縄文時代中期後葉の加曾利 E 式期の土器が出土した (上敷領他 2015)。

北東側に低く傾斜する面積 219.61 ㎡ の敷地内に、既存の住宅を解体後、木造 2 階建ての分譲住宅 2 棟を建設する内容の計画で、法 93 条に基づく届出が提出された。建物の根切深度自体は地表下約



第84図 調査区配置図 (K21-18)



第95図 殿ヶ谷戸遺跡第18次調査全体図



写真 79 Aトレンチ作業風景（南から）



写真 80 Aトレンチ全景（南から）



写真 81 Aトレンチ土層堆積状況（東から）



写真 82 Bトレンチ全景（南から）

30cm程度であったが、北側道路の公共下水に接続する排水管経路および最終樹設置部分が深い深度に達する工事のため、当該範囲に対して幅1.0m×長さ3.0～4.5mのトレンチ2本（Aトレンチ・Bトレンチ）を設定して調査に臨んだ。（第84図）

## 2. 発見された遺構と遺物

両トレンチともに約30～80cm厚の盛土直下でⅢb層を検出し、当該層中から縄文時代中期後葉の加曾利E3式土器10点、総重量252.4gが出土した。その後、漸移層（Ⅲc層）を掘り下げ、ソフトローム層上面で精査しても遺構は検出されなかったため、トレンチ全体をハードローム層（Ⅴ層）まで旧石器時代の遺跡の存否を探ってみたが、遺物の出土は見られなかった。そのため、本トレンチ部分の掘削をもって、確認調査を終了した。



## (10) 本町遺跡第19次調査

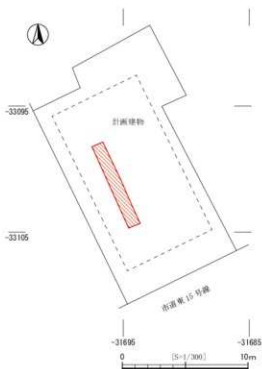
所在地	本町2丁目8-2	本町（国分寺村石器時代） 遺跡（遺跡№28）
令和2年9月28日付文化財保護法第93条第1項届出 （国教教ふ収第498号）		
調査原因	集合住宅	調査種別 確認調査
調査費用	国庫補助等	調査担当：桂・平塚
調査期間	令和2年12月10日（現場実働1日）	
調査面積	7.22㎡	遺物箱数 1箱
検出遺構	なし	
主な遺物	縄文時代の土器	



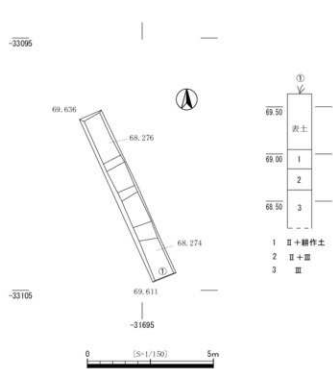
第96図 調査地点位置図（K28-19）

### 1. 調査の経緯と目的

調査地点は JR 中央本線国分寺駅の北東側で、国分寺崖線を北西側に大きく開析する本多谷南岸の武蔵野段丘面上に立地し、現況の標高は約 69.5 m をはかる。本町遺跡の調査では、これまで南側の線路敷沿いを中心に縄文時代の竪穴建物が数多く分布することが判明しているが、当該地から約 20 m 北東に位置する第 17 次調査では、中期末の柄鏡形敷石建物 1 棟発見されている（依田 2020）。既存住宅解体後、RC 構造 5 階建ての共同住宅 1 棟を建設する内容の計画で、法 93 条に基づく届出が提出された。新築建物建設にかかる掘削面積は約 104 ㎡で、設計 GL より基礎下地を 1.4 m 下げ、さらに長さ 5.5 m の鋼管杭を 11 本打設する計画であり、周辺での調査状況から縄文時代の遺構・遺物包含層を壊す可能性が高いことから、建物範囲の一部に対して幅 1.0 m × 長さ 8.0 m のトレンチを設定して確認調査に臨んだ。（第 97 図）



第97図 調査区配置図（K28-19）



第98図 本町遺跡第19次調査全体図



写真 83 表土掘削作業風景（南から）



写真 84 トレンチ東面土層堆積状況（西から）



写真 85 トレンチ全景（南から）

## 2. 発見された遺構と遺物

約 50 ～ 60cm 厚の盛土直下で黒褐色土を検出し、当該層中から縄文時代中期の土器 7 点（勝坂式 6 点・加曾利 E 3 式 1 点）、総重量 135.9g が出土したが、遺構は確認されなかった。その後、地表から 1.4 m の深度まで掘り下げたところ、黒色土の堆積がさらに続き、2・3 層中からは遺物も見られなくなったため、確認調査を終了した。

## (11) No. 35 遺跡第1次調査

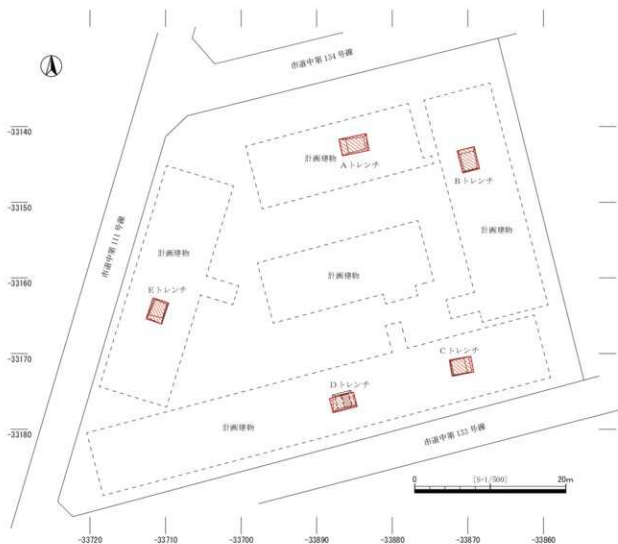
所在地	日吉町1丁目3-25		No. 35 遺跡 (遺跡No. 35)	
令和2年7月28日付文化財保護法第93条第1項届出 (国教教ふ収第298号)				
調査原因	寄宿舎	調査種別	確認調査	
調査費用	国庫補助等, 原因者協力	調査担当: 平塚		
調査期間	令和3年2月19日 (現場実働1日)			
調査面積	30.47 m <sup>2</sup>	遺物箱数	なし	
検出遺構	なし			
主な遺物	なし			



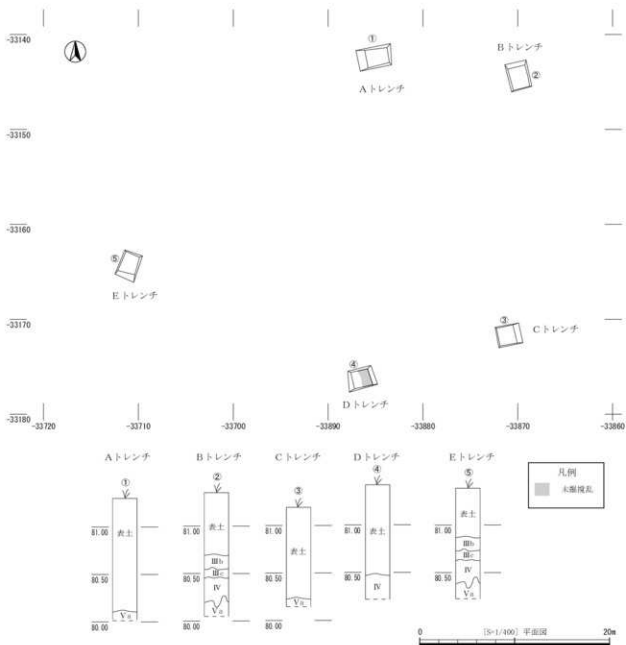
第99図 調査地点位置図 (K35-1)

### 1. 調査の経緯と目的

調査地点は JR 中央本線と新府中街道の立体交差北東側で、国分寺崖線から約 1 km 北上した武蔵野段丘面上に立地し、現況の標高は約 81.3 m をはかる。周囲は起伏の少ない平坦な地形で、前述のとおり、当該包蔵地範囲内でこれまでに発掘調査実績はなく、縄文時代の散布地として周知されている内実を探る目的から、法 93 条に基づく届出を契機に確認調査を実施することとした。なお、届出の内容は、敷地中央の食堂を囲んで 3 階建ての寄宿舎を 4 棟建設する計画で、いずれの建物も地下ピットを設計 GL



第100図 調査区配置図 (K35-1)



第101図 No.35遺跡第1次調査全体図

より約2.0m（最大2.8m）掘削するものであった。そこで、食堂を除く各建物範囲内に幅2.0m×長さ3.0mの試掘坑を5箇所予定し、工事着手の直前に事業者から重機提供の協力を得て、確認調査に臨んだ。（第100図）

## 2. 発見された遺構と遺物

B・Eトレンチでは約50～60cm厚の盛土直下でIII b層の堆積を確認したが、当該層中からは遺構・遺物ともに確認されなかった。また、A・C・Dトレンチは約1.0～1.2mの盛土直下でソフトルーム層を検出し、III c・III b層より上位の黒ボクは既に削平されている状況が判明した。いずれのトレンチからも遺物は出土しなかった。



写真 86 調査地点近景（北西から）



写真 87 Aトレンチ全景（西から）



写真 88 Bトレンチ全景（東から）



写真 89 Cトレンチ全景（北から）



写真 90 Dトレンチ全景（北から）



写真 91 Eトレンチ全景（北から）

## (12) No.52 遺跡第1次調査

所在地	西恋ヶ窪 3丁目29-7ほか	No.52 遺跡 (遺跡No.52)
令和2年12月8日付文化財保護法第93条第1項届出 (国教教ふ収第727号)		
調査原因	分譲住宅・宅地造成	調査種別 確認調査
調査費用	国庫補助等	調査担当 平塚
調査期間	令和3年2月1日～2月3日 (現場実働3日)	
調査面積	11.84㎡	遺物箱数 なし
検出遺構	なし	
主な遺物	なし	



第102図 調査地点位置図 (K52-1)

### 1. 調査の経緯と目的

調査地点はJR中央線西国分寺駅の北西約600mに位置し、通称「エックス山」と呼ばれる西恋ヶ窪緑地の西側近接地である。周辺は、東西方向に伸びる野川源流域の恋ヶ窪谷西側最奥部にあたり、谷の北側には熊ノ郷遺跡、南側にはNo.37遺跡が広がり、ともに旧石器時代の遺跡が確認されている。前述のとおり、当該包蔵地範囲内でこれまでに発掘調査実績はなく、旧石器時代・縄文時代の散布地として周知されている遺跡の内実を探る目的から、法93条に基づく届出を契機に確認調査を実施することとした。なお、届出内容は、約944㎡におよぶ旧畑地に対して、新たに7棟の戸建て分譲住宅を建設する計画で、建物の根切深度は設計GLより約0.3mであったが、各区画には幅1.3m×延長3.6m×深さ

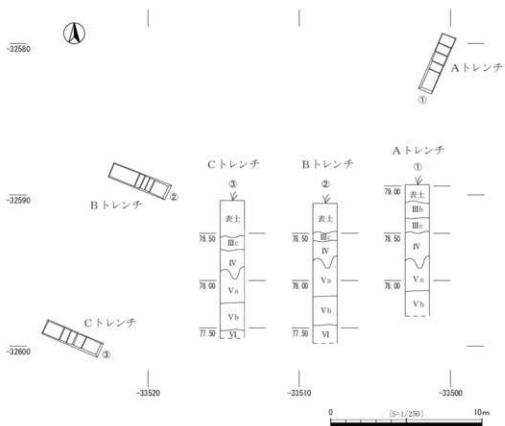
1.0mの浸透トレンチを敷設する予定であり、相対的に深度が深い当該部分を中心に幅1.0m×長さ4.0mのトレンチを、1・4・6号棟部分の3箇所に設定して(A～Cトレンチ)、確認調査に臨むこととした。(第103図)



第103図 調査区配置図 (K52-1)

### 2. 発見された遺構と遺物

調査の結果、いずれのトレンチからも表土直下で、市内で縄文時代の遺物を包含するⅢb・Ⅲc層の堆積を確認したものの、当該層からは遺構・遺物ともに確認されず、さらにローム層を地表下約1.5mの深度まで掘削を進めた。このうち、B・Cトレンチでは第一暗色帯(VI層)の上部まで到達し、ソフトローム(IV層)・ハードローム(V層)ともに旧石器時代の遺物は検出されなかったが、CトレンチのIV～V層中において8点の炭化物が認められた。当該炭化物が何に起因するものか詳細は不明であるが、確認調査をもって調査は終了した。



第 104 図 No. 52 遺跡第 1 次調査全体図



写真 92 調査地点近景 (西から)



写真 93 B トレンチ全景 (西から)



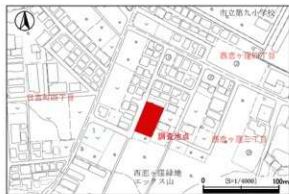
写真 94 B トレンチ土層堆積状況 (北から)



写真 95 C トレンチ炭化物検出状況 (北西から)

### (13) No. 52 遺跡第2次調査

所在地	西志ヶ窪 3丁目35-31ほか	No. 52 遺跡 (遺跡No. 52)
令和3年2月1日付文化財保護法第93条第1項届出 (国教教ふ収第837号)		
調査原因	宅地造成	調査種別 確認調査
調査費用	国庫補助等	調査担当: 平塚
調査期間	令和3年3月1日～3月5日 (現場実働4日)	
調査面積	8.45 m <sup>2</sup>	遺物箱数 1箱
検出遺構	なし	
主な遺物	縄文時代の石器	



第105図 調査地点位置図 (K52-2)

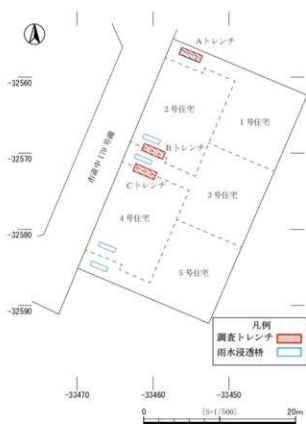
#### 1. 調査の経緯と目的

調査地点は第1次調査地点の北西隣接地にあたり、法93条に基づく届出は625.6 m<sup>2</sup>の敷地内に5区画の宅地造成を行う計画で、各区画に宅内雨水浸透トレンチを敷設する内容であった。1次調査において旧石器時代の石器類は出土しなかったものの、ローム層中より炭化物の検出が認められたため、遺跡の状況をさらに追究する目的から浸透トレンチ部分を中心にトレンチを3箇所設定し(A～Cトレンチ)、確認調査に臨むこととした。

(第106図)

#### 2. 発見された遺構と遺物

調査の結果、いずれのトレンチからも表土直下で、市内で縄文時代の遺物を包含するⅢb層の堆積を確認し、Cトレンチからは縄文時代の石器がⅢb層中より1点出土した。さらに、旧石器時代の遺跡の存否を確認するため、ソフトローム(Ⅳ層)およびハードローム層上部(Va層)まで掘り下げたが、遺物の検出は認められなかった。このうち縄文時代の打製石斧1点を図示した(第108図)。1は砂岩製の短冊形を呈する打製石斧で、長さ14.2cm、幅5.6cm、厚み2.6cm、重量234.2gをはかる。中期の所産であろうか。



第106図 調査区配置図 (K52-2)

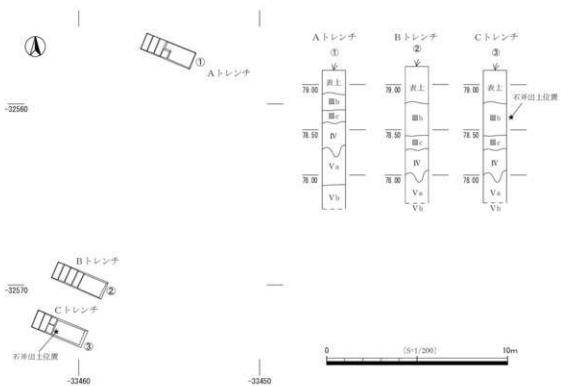


写真96 調査地点近景 (北から)

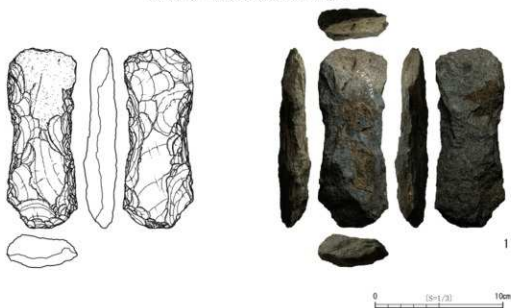


写真97 作業風景 (南から)





第 107 図 No. 52 遺跡第 2 次調査全体図



第 108 図 No. 52 遺跡第 2 次調査出土の打製石斧



写真 98 C トレンチ遺物出土状況 (東から)



写真 99 A トレンチ土層堆積状況 (東から)

### 第3節 自然科学分析

#### (1) 武蔵国分寺跡第760次調査出土人骨の人類学的分析

奈良貴史・佐伯史子(新潟医療福祉大学・自然人類学研究所)  
鈴木敏彦・波田野悠夏(東北大学院歯学研究所)

#### はじめに

武蔵国分寺跡第760次調査において土坑SK3475から人骨が出土した。これは人類学的調査の報告である。歯の計測は藤田(1949)、杉山(1964)に準拠した。歯の計測値は表13に示す。

#### 遺存状況

保存状態は不良で、欠損している部位がほとんどである。同定できた部位は下顎骨の歯槽部、大腿骨遠位部片、ならびに歯である。残存する歯は全て遊離歯で、歯槽に植立するものはない。下顎左側第一大臼歯に重複を認め、少なくとも2個体を認める。主たる個体をA個体、乳歯を含む個体をB個体とした。水平線は上下顎の境界を、垂直線は正中線を表し、向かって左側が個体の右を意味する。歯の記号が記されている箇所は歯の存在が確認された部分で、Iは切歯、Cは大歯、Pは小臼歯、Mは大臼歯、diは乳切歯、dcは乳大歯、dmは乳臼歯をそれぞれ表し、また数字は同一歯種内での順位を表す。

#### A個体

遺存する歯の歯式を以下に示す(写真100-A)。歯は全て遊離歯で、歯槽に植立するものはない。これらの歯に伴うと思われる下顎骨の歯槽部、大腿骨遠位部片のみが同定できたが、そのほかに細片骨が数十片存在する(写真100-B)。

◇		◇	◇	▽					▽	◇		◇	◇	◇	
M3	=	M1	P2	P1	=	=	=	=	=	C	P1	=	M1	M2	M3
M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	=	=	=	P1	P2	M1	M2	=	
◇	◇	◇	▽	◇	▽	▽				◇	▽	◇	◇		

◇: 歯槽の有無は確認できないが、歯冠・歯根共に遺存するもの(遊離歯)

▽: 歯槽の有無は確認できないが、歯冠のみが遺存するもの(遊離歯)

=: 歯槽、歯ともに確認できず状況不明であるもの

年齢: 全ての歯は萌出済みであり、上下顎第一大臼歯の咬耗は、Molnerの分類で4度の咬耗を認めることから壮年以上と推察される。

性別: 歯冠計測値を江戸時代関東の男性の平均と比較してみると明らかに大きい傾向はみられず、性別を推定することは困難である。

特記事項: 齶蝕は認めない。全ての歯にエナメル質減形成が確認される。

#### B個体

2個の歯冠が確認されたのみである。残存する歯は全て遊離歯で、歯槽に植立するものはない。歯式を以下に示す(写真100-C)。

年齢: 下顎第二乳臼歯において咬耗は認めず、未萌出か萌出直後と推察される。下顎左側第一大臼歯は歯冠のみが完成する。以上の事から2歳から2歳半までと推測される。

性別: この年齢段階の性別推定は困難なことから、不明である。



▽: 歯槽の有無は確認できないが、歯冠のみが遺存するもの（遊離歯）  
 =: 歯槽、歯ともに確認できず状況不明であるもの

特記事項：齶蝕、ならびにエナメル質減形成が確認されない。

### まとめ

出土した人骨は、壮年程度の成人1体と2歳前後の幼児である。

### 【文献】

- 藤田恒太郎 (1949) 歯の計測基準について. 人類学雑誌, 61: 27-31.  
 Molnar S. (1971) Human tooth wear, tooth function and cultural variability. American journal of Physical Anthropology, 34: 175-190.  
 杉山乗也, 黒須一夫. 1964. 乳歯の計測基準について. 小児歯誌 2: 1-8.  
 Ubelaker DH. 1989. Human skeletal remains: Excavation, Analysis, Interpretation (2nd edition). Washington, DC. : Taraxacum: 17

表 13 歯冠計測値 (mm)

		右側		左側		右側		左側		
		近遠心径	唇・頬舌径	近遠心径	唇・頬舌径	近遠心径	唇・頬舌径	近遠心径	唇・頬舌径	
【乳歯】	上顎	乳中切歯 (a1)	—	—	—	—	—	—	—	—
		乳側切歯 (a2)	—	—	—	—	—	—	—	—
	乳犬歯 (dc)	—	—	—	—	—	—	—	—	
	第一乳臼歯 (dm1)	—	—	—	—	—	—	—	—	
	第二乳臼歯 (dm2)	—	—	—	—	—	—	—	—	
	下顎	乳中切歯 (a1)	—	—	—	—	—	—	—	—
		乳側切歯 (a2)	—	—	—	—	—	—	—	—
		乳犬歯 (dc)	—	—	—	—	—	—	—	—
		第一乳臼歯 (dm1)	—	—	—	—	—	—	—	—
		第二乳臼歯 (dm2)	—	—	—	—	1023	917	—	—
【永久歯】	上顎	中切歯 (I1)	—	—	—	—	—	—	—	—
		側切歯 (I2)	—	—	—	—	—	—	—	—
		犬歯 (C)	—	—	7.70	8.13	—	—	—	—
	第一小臼歯 (P1)	7.08	9.26	7.04	9.25	—	—	—	—	
	第二小臼歯 (P2)	6.27	9.15	—	—	—	—	—	—	
	第一大臼歯 (M1)	10.77	12.11	10.89	12.70	—	—	—	—	
	第二大臼歯 (M2)	—	—	10.73	12.24	—	—	—	—	
	第三大臼歯 (M3)	9.95	12.06	8.25	11.03	—	—	—	—	
	下顎	中切歯 (I1)	—	—	—	—	—	—	—	—
		側切歯 (I2)	5.71	6.36	—	—	—	—	—	—
		犬歯 (C)	7.14	8.46	—	—	—	—	—	—
		第一小臼歯 (P1)	7.27	8.17	6.94	8.22	—	—	—	—
		第二小臼歯 (P2)	6.57	8.15	6.81	7.95	—	—	—	—
		第一大臼歯 (M1)	11.74	11.13	11.82	11.12	—	—	11.52	10.3
第二大臼歯 (M2)		11.93	11.29	11.27	10.93	—	—	—	—	
第三大臼歯 (M3)	12.02	10.74	—	—	—	—	—	—		

—: 該当歯が存在しないもの



写真 100 出土人骨

[A] A個体歯

[B] 1～2：A個体下顎歯槽部片、3：A個体大腿骨遠位部片、4～6：A個体四肢骨片

[C] B個体歯

## (2) 武蔵国分寺跡第760次調査出土人骨の同位体分析

米田 穂・大森 貴之・尾崎 大真 (東京大学総合研究博物館)

### はじめに

武蔵国分寺跡第760次調査から出土した人骨資料1点から残存するコラーゲンを抽出し、生前のタンパク質の由来を反映する炭素・窒素同位体比と、生存年代を示す放射性炭素年代の測定を試みた。今回分析した試料ではコラーゲンの保存状態が悪く分析結果が得られたなかったが、前処理と保存状態の判定基準について報告する。

### 資料と方法

人骨1点から、約0.6g程度の緻密質片をダイヤモンドカッターで採取し、骨の主要な有機物であるコラーゲンというタンパク質を抽出して分析に供した。試料の前処理として、アルカリ溶液で土壌有機物を除去し、さらにコラーゲンを熱変成させることで他の有機物から精製するゼラチン化を行った (Longin 1971; Yoneda et al. 2002)。具体的な手順として、最初に酸化アルミニウム粉末をサンドブラストし、超純水中で10分間超音波洗浄して表面に付着する異物や海綿質を除去した。次に4℃の0.4M塩酸中に39.5時間静置して、無機質のヒドロキシアパタイトを脱灰してから、純水中で4.5時間静置して中性に戻した。脱灰した試料を0.1Mの水酸化ナトリウム溶液中に3.5時間静置して、フルボ酸やフミン酸などの酸に溶ける土壌有機物を除去した。超純水で3.5時間静置することで中性にしてから、塩酸でpHの薄い塩酸溶液中で90℃まで加熱して、水に溶けるゼラチン化して、ガラス繊維ろ紙(Whatman GF/F)で吸引濾過して不要成分を除去して、コラーゲンを主成分とする期待されるゼラチンを精製した。

ゼラチンの炭素および窒素の重量含有率および安定同位体比の測定は、放射性炭素年代測定室において、Thermo Fisher Scientifics社製のFlash2000元素分析を前処理装置として、ConFloインターフェースを経由して、Delta V安定同位体比質量分析装置で測定する、EA-IRMS装置を用いて行った。約0.4mgの精製試料を錫箔に包み取り、測定に供した。測定誤差は、同位体比が値付けされている二次標準物質(アラニン等)を試料と同時に測定することで標準偏差を計算した。通常の測定では、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定誤差は0.2‰、 $\delta^{15}\text{N}$ の誤差は0.2‰である。

### 結果

ゼラチン回収率が1%未満の場合、コラーゲンが変性している可能性があるが (van Klinken 1999)、今回分析した人骨資料の回収率が0.6%の回収率となり、目安を下回った (表14)。また、コラーゲンの保存状態の指標となる炭素・窒素の原子数比 (C/N比) では6.5という値を示し、生体中で期待される2.9~3.6の範囲から外れた。以上より、今回分析に供した人骨ではコラーゲンの変性あるいは外部有機物の混入の可能性がある (DeNiro 1985)。炭素・窒素同位体比は生前のタンパク質源を反映していない可能性があるため、食生活に関する議論には用いることができない。放射性炭素年代についても、汚染の危険があるので、実施しないこととした。

表14 ゼラチン回収率とEA-IRMSによる分析結果

資料名	測定ID	回収率	$\delta^{13}\text{C}$	$\delta^{15}\text{N}$	炭素濃度	窒素濃度	C/N比
人骨	YL44275	0.60%	-19.8‰	16.1‰	33.50%	6.00%	6.5

[引用文献]

- DeNiro, M.J. (1985). Postmortem preservation and alteration of *in vivo* bone-collagen isotope ratios in relation to paleodietary reconstruction. *Nature* 317, 806-809.
- Longin, R. (1971). New method of collagen extraction for radiocarbon dating. *Nature*, 230, 241-242.
- Omori, T., Yamazaki, K., Itahashi, Y., Ozaki, H., Yoneda, M., (2017) Development of a simple automated graphitization system for radiocarbon dating at the University of Tokyo. The 14th International Conference on Accelerator Mass Spectrometry.
- Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa (2002). Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. *Radiocarbon* 44, 549-557.

### (3) 武蔵国分寺跡第760次調査出土黒曜石の蛍光X線による産地推定分析

足立とも (東京学芸大学大学院・現坂戸市教育委員会)  
新免歳靖 (東京学芸大学)

#### 1. はじめに

武蔵国分寺跡第760次調査では縄文時代の遺構は検出されていないが、出土した遺物のなかには縄文土器片数点と黒曜石製石器1点、同剥片1点が確認された。調査地点北側の国分寺崖線上には、中期勝坂式期を中心とする集落遺跡である多喜窪遺跡が展開し、第2章第2節(3)で触れた第758次調査でも堅穴建物1棟発見されている。近在の縄文遺跡における黒曜石流通の実態を追求するため、本地点出土の黒曜石製石器・剥片について蛍光X線分析を用いた産地推定を試行し、以下、その方法および結果を報告する。

#### 2. 試料

産地推定分析に用いた試料は、武蔵国分寺跡第760次調査で出土した黒曜石資料2点を用いた。いずれも奈良・平安時代の堅穴建物覆土より出土した石器で、石鏃と剥片である。(実測図・写真等の詳細は、第2章第2節(6)を参照されたいが(第49図5・第72図5参照)、各試料の法量・器種・分析結果などを表15に示す。

表15 分析試料の属性と分析結果

試料No.	資料No.	器種	石材	重量(g)	MnO	FeO	SrO	CaO	RbO	K <sub>2</sub> O	推定産地
1	S1274-5	石鏃	黒曜石	0.5	3.0	26.7	0.2	13.0	1.1	54.0	星ヶ塔
2	S1830-5	剥片	黒曜石	3.8	4.6	27.6	0.0	13.4	2.2	52.2	小深沢

#### 3. 産地推定分析の方法

産地推定に用いる各元素の測定には、エネルギー分散型蛍光X線分析(非破壊法)を用いた。測定条件は以下の通りである。

分析装置: 日立ハイテクサイエンス製エネルギー分散型蛍光X線分析装置 SEA-5120S、線源ターゲット: モリブデン(Mo)管球、管電圧: 45kV、管電流: 40  $\mu$  A、X線照射径:  $\phi$  1.8mm、測定雰囲気: 大気、測定時間: 180秒、定量分析の計算方法: FP法、標準試料: なし

黒曜石の主成分元素のうち、産地推定の指標となる鉄(Fe)、カルシウム(Ca)、カリウム(K)の3元素と、主要成分元素と挙動に相関性がある微量元素のマンガン(Mn)、ストロンチウム(Sr)、ルビジウム(Rb)の3元素の計6元素について測定を行った。これらの6元素は、東日本の黒曜石の産地分析に有効であることが示されている(管頭ほか2020等)。

測定に際しては、機器に内蔵されたCCDカメラによる試料表面の観察を行い、X線照射範囲がなるべく平滑かつ新鮮な面となるように心がけ、1試料につき1回の測定を行った。

産地推定の基準資料として、関東周辺の主要な黒曜石産地である高原山(栃木県)、小深沢・男女倉・星ヶ塔・麦草峠(長野県)、畑宿(神奈川県)、上多賀・柏峠(静岡県)、神津島(東京都)の各産地黒曜石を用いた。各産地黒曜石の分析値とその平均値を表16に示す。

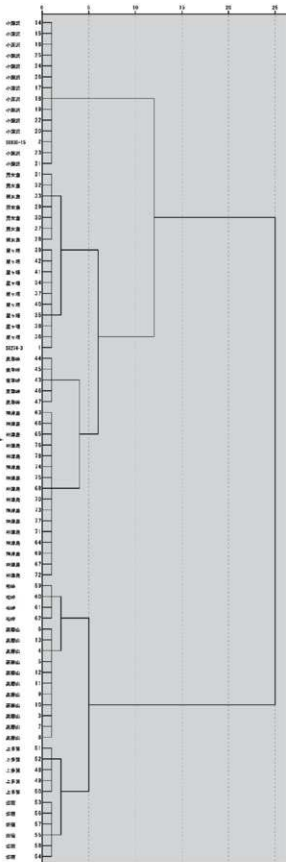
産地推定は、上にあげた6元素の測定結果をもとに、資料全点と産地資料群について最遠隣法によるクラスター分析を実施し、その分類結果から産地を推定した。クラスター分析には、IBM社製SPSS Statistics24を用いた。

表 16 原産地毎の元素分析平均値

産地名	MnO	FeO	SrO	CaO	Fb <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O
高原山	2.2	45.7	0.7	21.9	0.7	28.7
高原山	2.1	45.1	0.7	23.0	0.6	28.5
高原山	2.2	45.7	0.7	22.6	0.7	28.3
高原山	2.3	46.1	0.7	21.1	0.7	29.2
高原山	2.2	45.3	0.7	21.9	0.6	29.2
高原山	2.1	45.4	0.7	21.8	0.7	29.3
高原山	2.1	46.0	0.6	22.3	0.6	28.3
高原山	2.1	45.1	0.6	21.9	0.7	29.6
高原山	2.2	46.3	0.8	22.8	0.7	27.2
高原山	2.2	46.2	0.7	22.8	0.8	27.3
高原山	2.4	46.8	0.8	20.8	0.7	28.6
平均値 (n=11)	2.2	45.8	0.7	22.1	0.7	28.6
小深沢	4.4	26.2	0.0	14.4	2.0	52.9
小深沢	4.4	26.4	0.0	14.4	2.1	52.7
小深沢	4.3	26.2	0.0	13.9	2.0	53.5
小深沢	4.3	26.4	0.1	14.7	2.0	52.4
小深沢	4.5	26.5	0.1	14.6	2.0	52.3
小深沢	4.7	24.9	0.0	14.1	2.1	54.2
小深沢	4.7	26.0	0.0	14.1	2.2	53.1
小深沢	4.4	24.9	0.0	13.1	2.0	55.6
小深沢	4.7	25.5	0.0	14.2	2.1	53.5
小深沢	4.5	25.8	0.1	13.2	2.1	54.3
小深沢	4.4	25.4	0.0	14.0	2.1	54.0
小深沢	4.4	25.2	0.0	14.2	2.0	54.2
小深沢	4.4	26.1	0.0	13.7	2.1	53.8
平均値 (n=13)	4.5	25.8	0.0	14.0	2.1	53.6
男女倉	3.2	29.6	0.5	16.3	1.1	49.3
男女倉	3.3	29.5	0.4	16.3	1.1	49.3
男女倉	3.0	29.9	0.4	15.8	1.1	49.9
男女倉	3.1	30.0	0.4	15.9	1.1	49.5
男女倉	3.0	30.0	0.5	16.0	1.0	49.5
男女倉	2.9	29.9	0.5	16.5	1.0	49.2
男女倉	3.1	29.8	0.5	16.8	1.0	48.9
平均値 (n=7)	3.1	29.8	0.5	16.2	1.0	49.4
星ヶ塔	3.6	25.1	0.3	14.8	1.1	55.2
星ヶ塔	3.7	25.4	0.2	13.7	1.1	55.8
星ヶ塔	3.7	25.5	0.3	13.4	1.2	55.9
星ヶ塔	3.5	25.4	0.3	13.4	1.1	56.3
星ヶ塔	3.7	25.6	0.3	14.3	1.1	55.1
星ヶ塔	3.7	24.8	0.3	15.1	1.1	54.9
星ヶ塔	3.6	25.3	0.3	13.9	1.1	55.8
星ヶ塔	3.6	25.2	0.4	14.7	1.1	55.0
星ヶ塔	3.7	25.1	0.3	14.6	1.1	55.2
平均値 (n=9)	3.6	25.3	0.3	14.2	1.1	55.5

産地名	MnO	FeO	SrO	CaO	Fb <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O
麦草峠	2.1	32.0	0.9	17.2	0.7	47.0
麦草峠	2.2	31.4	0.9	18.0	0.8	46.7
麦草峠	2.3	31.3	0.9	17.6	0.7	47.2
麦草峠	2.3	31.2	0.9	19.6	0.8	45.2
麦草峠	2.4	31.4	0.9	18.4	0.7	46.2
平均値 (n=5)	2.3	31.5	0.9	18.2	0.7	46.5
上多賀	2.8	51.2	1.1	24.8	0.3	19.8
上多賀	2.9	51.0	1.2	24.6	0.3	20.2
上多賀	2.7	49.9	1.1	25.0	0.2	21.1
上多賀	2.7	50.8	0.9	25.6	0.2	19.8
上多賀	2.7	50.5	1.0	25.1	0.2	20.5
平均値 (n=5)	2.7	50.7	1.1	25.0	0.2	20.3
畑宿	3.3	59.5	1.0	23.0	0.1	13.1
畑宿	3.4	61.0	1.2	21.3	0.1	13.0
畑宿	3.2	59.8	1.2	23.6	0.1	12.1
畑宿	3.3	60.5	1.1	22.5	0.2	12.5
畑宿	3.4	60.6	1.1	22.9	0.1	11.9
畑宿	3.0	59.2	1.0	23.9	0.1	12.8
平均値 (n=6)	3.3	60.1	1.1	22.9	0.1	12.6
柏峠	2.1	47.9	0.7	26.4	0.3	22.6
柏峠	2.0	49.0	0.8	26.0	0.3	21.9
柏峠	2.2	48.1	0.8	24.3	0.4	24.3
柏峠	2.4	48.2	0.8	24.6	0.4	23.6
平均値 (n=4)	2.2	48.3	0.8	25.3	0.3	23.1
神津島	3.8	33.5	0.7	20.5	0.5	41.0
神津島	3.6	33.7	0.7	20.4	0.6	41.1
神津島	3.9	33.2	0.7	20.7	0.6	40.9
神津島	3.9	33.0	0.7	20.2	0.6	41.6
神津島	3.4	33.5	0.7	20.9	0.6	41.0
神津島	3.7	33.0	0.7	20.9	0.6	41.1
神津島	3.5	33.1	0.6	20.7	0.5	41.5
神津島	3.6	33.0	0.6	20.6	0.6	41.6
神津島	3.7	33.0	0.7	20.9	0.6	41.2
神津島	3.6	33.2	0.8	21.8	0.6	40.1
神津島	3.7	34.0	0.7	21.0	0.5	40.1
神津島	3.9	32.7	0.8	21.0	0.5	41.1
神津島	4.0	33.6	0.7	20.6	0.6	40.5
神津島	3.9	33.3	0.7	20.7	0.6	40.8
神津島	3.7	33.6	0.7	21.1	0.6	40.4
神津島	3.9	33.0	0.7	21.3	0.6	40.6
平均値 (n=16)	3.7	33.3	0.7	20.8	0.6	40.9





第109図 黒曜石のクラスター分析結果

#### 4. 産地推定分析の結果

分析試料について6元素の測定結果を表15に示す。測定値は6元素の酸化物の総和を100としたときの百分率で表している。また、クラスター分析による樹形図を第109図として示す。

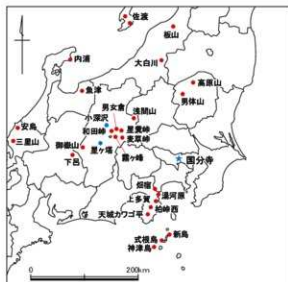
産地推定分析の結果、本遺跡より出土した黒曜石資料の産地の内訳は、小深沢1点、星ヶ塔1点であった(表17)。

#### 【参考文献】

- 菅頭明日香ほか2020「上ホシ遺跡(1)調査地点出土黒曜石資料の産地分析」『上ホシ遺跡(1)』船橋市遺跡調査会 pp.170-174  
 大工原豊・長田友也・建石徹[編]2020『考古調査ハンドブック 20 縄文石器概要』ニューサイエンス社  
 二宮修治ほか2019「石器石材原産地分析」『小金井市史 資料編 考古・中世』小金井市 pp.381-404

表17 産地の内訳

産地グループ	点数
高原山	—
小深沢	1点
男女倉	—
星ヶ塔	1点
麦草峠	—
畑宿	—
上多賀	—
柏峠	—
神津島	—
計	2点



第110図 黒曜石の原産地

### 第3章 総括

令和2年度は、前述のとおり市内13地点で発掘調査を実施した。以下、おもな調査内容を振り返りながら、当該年度に得られた成果を以下にまとめたい。

#### 【旧石器時代】

武蔵野段丘面上に立地する武蔵国分寺跡第757次調査と№52遺跡第1次調査で実施した。武蔵国分寺跡第757次調査地点では、V a～V b層（立川ロー層第IV層相当）付近で二次加工が認められる剥片と礫12点が東西2m×南北1mの範囲に広がって確認された。調査区をさらに広げることが叶わなかったが、剥片・礫の分布は崖線寄りの南側にも展開することが予測された。一方で、調査地点よりも北側へ約50～100m離れた現在の市立第四小学校（第431・446・460次調査/概報26）や旧四小跡地の発掘調査（第645次調査/概報36）でも、同層中から黒曜石製ナイフ形石器や頁岩製石核・叩き石などの石器製作跡、炭化物集中部等検出しており、人的行動範囲が崖線上に広く展開しているとみられる。また、№52遺跡では令和2年度にはじめて発掘調査を行った。当該地は、恋ヶ窪谷の谷頭部一帯に広がる埋蔵文化財包蔵地で、連続する地形面の東側に熊ノ郷遺跡、南側に№37遺跡があり、いずれも旧石器時代の遺跡として知られている。第1次調査地点では、IV～V層（立川ロー層第Ⅲ～Ⅳ層相当）より少量の炭化物集中範囲がみられた。樹種等の詳細は不明ながらも、周囲に人的活動の痕跡が存在する可能性はあり、今後の調査動向に注目していきたい。

#### 【縄文時代】

武蔵国分寺跡第756・758・760・761・762次調査、殿ヶ谷戸遺跡第18次調査、本町（国分寺村旧石器時代）遺跡第19次調査、№52遺跡第2次調査で縄文時代の遺構・遺物を検出している。このうち古代の武蔵国分寺跡と旧石器・縄文時代遺跡の多喜窪遺跡として二重周知されている武蔵国分寺跡第756・758次調査地点では、縄文時代の堅穴建物1棟を検出し、遺構の完掘作業は開発事業主負担による本調査にて対応した。近接地では戦後まもなく堅穴建物が発掘調査され、出土した中期中葉の勝坂式土器や石器類は、後に「武蔵多喜窪遺跡第一号住居跡出土品一括」として国の重要文化財に指定を受けているが、今次の調査で検出された建物も勝坂式を主体に五領ヶ台・阿玉台・加曾利E式を含む土器様相を呈していた。なお、建物覆土中からは約3,000点前後にのぼる多量の遺物が出土し、その詳細については別途報告する予定である。第756・758次調査地点の南方で、国分寺崖線下に位置する第760次調査地点では縄文時代の遺構こそ確認されなかったが、古代の堅穴建物覆土中から中期の所産と思われる黒曜石製の石織・剥片が各1点出土した。今回、東京学芸大学文化財科学研究室の協力のもと、蛍光X線を用いた原産地の検討を行ったところ、いずれも信州小深沢・屋ヶ塔産であるという分析結果を得た。僅か2点では市内遺跡全体での産地傾向を言及できないが、今後も時機を得ながら分析資料の蓄積を図ってきたい。また、本地点から東方に約600m離れた第762次調査では、陥し穴状土坑1基が発見されている。遺物は伴わないものの、覆土と形態から早期に帰属する可能性がある。同じ立川段丘面上では、府中市境の東八道路建設に伴う調査で4基（東京都建設局他1985）、国分寺市公共下水道面整備に伴う調査で1基（第35次調査/概報12）、武蔵国分寺寺院地東南部で1基（第710次調査/平成27年度年報）、で計6基の検出事例があり、付近一帯は狩猟の場として土地利用されていたものと思われる。

#### 【奈良・平安時代】

武蔵国分寺跡第754・755・757・760・761・762次調査で奈良・平安時代の遺構・遺物が発見されている。第754次調査は、昭和52・60年に調査した第28・250次調査地点の再調査で、瓦側壁を伴う掘立柱建物と伽藍地西辺区画溝、さらに東西両側に廂を有し桁行9間以上にもおよぶ大型掘立柱建物が検出された。これらの遺構は将来的に史跡の保存整備事業で遺構復元を行う予定で、令和2年度中に実施設計の検討まで終えている。第760次調査も、昭和56・57年度に第135次調査として学術調査を実施した場

所の再調査で、過去の調査で東山道武蔵路と周辺に堅穴建物の存在を確認し、道路築成土中から出土した銅造観世音菩薩立像は、後に東京都有形文化財（彫刻・考古資料）の指定を受けている。このたび開発事業主の御協力を得て本調査を実施したところ、堅穴建物5棟と東山道武蔵路の東側側溝の延長部分が検出され、過去の調査で平面プランの確認作業に留めていた堅穴建物は、今回の調査で9世紀中頃～10世紀前半頃の所産であることが判明した。僧寺七重塔の東側に近接する第761・762次調査では、平安時代の堅穴建物12棟が確認され、出土した遺物から9世紀末～10世紀初頭、10世紀末～11世紀後半のおおよそ2時期に廃絶した様相を捉えることができた。第760～762次調査地点は僧寺寺院地区画の範囲内にあたり、国分寺を取り巻く集落域の様相が垣間見えた結果に繋がった。

#### 【中世以降】

武蔵国分寺跡第760次調査において、中世の土坑2基が発見された。そのうち1基（SK3470）からは15世紀代の所産と思われる古瀬戸系の天目茶碗が1点出土し、もう1基（SK3475）の覆土中では人骨片を含んでおり、墓塚としての性格が考えられる。骨片は極めて遺存状況が悪く、食生活を探る同位体分析や放射性炭素による年代測定分析には必ずしも有効な資料とはなり得なかったが、人類学的な見地からは壮年成人と2歳前後の幼児人骨と判定された。

同様の土壌墓は、尼寺伽藍中心部・恋ヶ窪寺跡・僧寺伽藍地東辺でも検出されており、未だ断片的な考古学的情報でしかないけれども、古代武蔵国分寺の寺院地・伽藍地一帯が、中世には墓域となった土地利用のあり方として注目すべき成果となった。

#### 【引用・参考文献】

- 有吉重蔵 1984 「第28次調査」『武蔵国分寺遺跡調査会年報Ⅱ 昭和51～53年度 寺地・僧寺々城確認調査 第1分冊』  
国分寺市教育委員会・武蔵国分寺遺跡調査会
- 稲村垣元ほか 1923 『東京府史蹟勝地調査報告書』東京都
- 井上喜久治 1893 『玉川沿岸遺跡探見の記』『東京人類学会雑誌』9-93
- 太田清六 1936 『武蔵国分寺の伽藍配置に就て』『建築世界』29-10・12
- 大野延太郎・島居龍蔵 1894 『武蔵国北多摩郡国分寺村石器時代遺跡』『東京人類学会雑誌』9-102ほか
- 岡崎完樹ほか 1985 『武蔵国分寺跡発掘調査報告-南方地区・府中都市計画道路（1・2・1号線の2）建設に伴う調査-』  
東京都建設局・武蔵国分寺関連遺跡調査会
- 小野本教ほか 2011 『武蔵国分寺跡発掘調査概報 36』国分寺市遺跡調査団・国分寺市遺跡調査会
- 上敷領久ほか 2015 『平成25年度国分寺市埋蔵文化財調査年報（2015）』国分寺市教育委員会・国分寺市遺跡調査団
- 上村昌男・有吉重蔵 1982 『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅵ 市公共下水道南部地区15号工事に伴う発掘調査』
- 上村昌男ほか 2002 『武蔵国分寺跡発掘調査概報 26』国分寺市教育委員会
- 佐藤敏也ほか 1986 「第三章 弥生・古墳時代 第一節 弥生時代」『国分寺市史 上巻』
- 坂詰秀一ほか 2013 『武蔵国分寺跡発掘調査概報 38』国分寺市教育委員会・国分寺市遺跡調査会
- 滝口宏ほか 1988 『武蔵国分寺跡発掘調査概報 12』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 滝口宏ほか 1989 『武蔵国分寺跡発掘調査概報 14』国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 滝口宏ほか 1994 『武蔵国分寺跡発掘調査概報 20』国分寺市遺跡調査会・国分寺市遺跡調査会
- 実川順一 1986 「国分寺市内における先土器時代の様相」『国分寺市史 上巻』
- 福田信夫ほか 1986 「第二章 縄文時代 第七節 市内の遺跡」『国分寺市史 上巻』
- 松村恵司 1999 「大型建物の系譜と性格の変遷」『公開セミナー古代の大型建物跡 記録集-役所か邸宅か』  
財団法人かながわ考古学財団
- 吉田 格 1952 「東京都国分寺町野原・郷、殿ヶ谷遺跡：南関東地方縄文式文化以前の研究 I」『考古学雑誌』38-2
- 吉田 格 1954 「武蔵野台地の縄文式文化以前の遺跡」『武蔵野』33-3・4
- 吉田 格ほか 2002 『武蔵国分寺跡発掘調査概報 26』国分寺市遺跡調査会
- 吉田 格ほか 2003 『武蔵国分寺跡発掘調査概報 28』国分寺市遺跡調査会
- 依田亮一 2020 「本町遺跡第17次」『平成30年度国分寺市埋蔵文化財調査概報』国分寺市教育委員会ほか
- 依田亮一ほか 2021 『令和元年度国分寺市埋蔵文化財調査概報』国分寺市教育委員会ほか

報告書抄録

ふりがな	れいわにねんど こくぶんじしまいぞうぶんかざいちょうさがいほう
書名	令和2年度 国分寺市埋蔵文化財調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	平塚恵介・中野 純・石森 光・依田亮一・奈良貴史・佐伯史子・足立とも与・新免歳晴・米田穰・大森貴之・尾寄大真・鈴木敏彦・波田野悠夏
編集機関	国分寺市教育委員会・国分寺市遺跡調査会
所在地	〒185-0023 東京都国分寺市西元町1-13-10 武蔵国分寺跡資料館内 TEL 042-300-0073
発行年月日	令和4年(2022)3月31日
規格/部数	A4版横組1段 46文字×34行 122頁/300部
資料の保存 問い合わせ先	国分寺市教育委員会 教育部 ふるさと文化財課 〒185-0023 東京都国分寺市西元町1-13-10 武蔵国分寺跡資料館内 TEL 042-300-0073 FAX 042-300-0091 E-mail bunkazai@city.kokubunji.tokyo.jp

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇° 〇′ 〇″	東経 〇° 〇′ 〇″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
武蔵国分寺跡 第754次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	35° 41′ 35″	139° 28′ 15″	20201027 ～ 20201124	244.79	史跡保存整備
武蔵国分寺跡 第755次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	36° 18′ 22″	140° 11′ 46″	20200901 ～ 20200907	28.52	集合住宅
武蔵国分寺跡 第756次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	11・19	36° 18′ 17″	140° 12′ 06″	20200616 ～ 20200625	21.85	分譲住宅
武蔵国分寺跡 第757次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19	36° 18′ 17″	140° 11′ 57″	20200803 ～ 20200826	63.23	個人住宅
武蔵国分寺跡 第758次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	11・19	36° 18′ 17″	140° 12′ 06″	20200626 ～ 20200728	34.21	分譲住宅
武蔵国分寺跡 第759次調査	東京都 国分寺市 泉町	13-214	19	36° 18′ 06″	140° 11′ 40″	20201217	7.45	集合住宅
武蔵国分寺跡 第760次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	10・19・ 58	35° 41′ 28″	139° 28′ 09″	20200914 ～ 20201029	222.03	集合住宅

要約	<p>令和2年度は、埋蔵文化財包蔵地内で15件の発掘調査を実施した。その内訳は、武蔵国分寺跡9地区、№52遺跡で2地区、花沢西遺跡・殿ヶ谷戸遺跡・本町（国分寺村石器時代）遺跡・№35遺跡で各々1地区であった。</p> <p>縄文時代では武蔵国分寺北方の武蔵野段丘面上で、縄文時代中期の竪穴建物1棟を発見した。付近一帯は「多喜窪遺跡」としても周知された範囲で、勝坂式期を中心とした集落域が形成された一角にあたる。本調査（武蔵国分寺跡第758次）にかかる詳細の報告は、別途刊行を予定している。</p> <p>奈良・平安時代では、僧寺伽藍中核部の北西で瓦側壁と大型土坑を併設し、須恵器大甕が出土した掘立柱建物と、東西両側に廂を伴う桁行9間以上もの大型掘立柱建物を調査した（第754次調査）。この他、寺院地区画内では2箇所調査を行い（第760～762次調査）、七重塔の再建期である9世紀中頃以降の集落様相が明らかとなった。</p> <p>中世では、武蔵国分寺跡第760次調査で、15世紀代の古瀬戸系天目茶碗と人骨を伴う墓壇を調査した。同様の土壌層は、尼寺伽藍中心部・恋ヶ窪院寺跡・僧寺伽藍地東辺でも検出されており、古代武蔵国分寺の伽藍地・寺院地一帯が中世には墓域となったことを示す貴重な成果が得られた。</p>
----	---

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武蔵国分寺跡	集落跡 社寺跡	旧石器・縄文・奈良・平安・中世・近世	掘立柱建物（SB39・SB91）、溝（SD23）、土坑（SK163）、不明遺構（SX367）	縄文時代の土器、奈良・平安時代の瓦・土器・石製品	史跡整備工事のための事前遺構確認調査。過去の調査で検出した掘立柱建物の性質を確認するために実施。
武蔵国分寺跡	集落跡	旧石器・縄文・奈良・平安・中世・近世	溝（SD438）、土坑（SK3463・SK3464）	縄文時代の土器、奈良・平安時代の瓦・土器	寺院地区画溝東辺部の集落跡
武蔵国分寺跡	集落跡	旧石器・縄文・奈良・平安・中世・近世	竪穴建物（プラン確認まで）	縄文時代の土器・石器	本調査MK758次調査に移行
武蔵国分寺跡	集落跡	旧石器・縄文・奈良・平安・中世・近世	竪穴建物（SI339・SI340）	旧石器時代の石器、縄文時代の土器・石器、奈良・平安時代の瓦・土器	
武蔵国分寺跡	集落跡	旧石器・縄文・奈良・平安・中世・近世	竪穴建物（SI827J）、土坑（SK3524J）	縄文時代の土器・石器	MK756次調査を受けて実施した本調査。
武蔵国分寺跡	集落跡	旧石器・縄文・奈良・平安・中世・近世	なし	なし	
武蔵国分寺跡	集落跡	旧石器・縄文・奈良・平安・中世・近世	竪穴建物（SI274・275・828・829・830）、溝（SD5東山道武蔵路側溝・140・143・439・440）、土坑（SK3465～3475） 小穴36基	縄文時代の土器・石器、奈良・平安時代の瓦・埴・土器・石製品・金属中世の土器、磁器・漆・人骨	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
武蔵国分寺跡 第761次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	19	36° 18′ 25″	140° 11′ 39″	20201019 ～ 20201020	70.5	宅地造成・分譲 住宅
武蔵国分寺跡 第762次調査	東京都 国分寺市 西元町	13-214	19	36° 18′ 25″	140° 11′ 39″	20201201 ～ 20210116	364.7	宅地造成・分譲 住宅
花沢西遺跡 第26次調査	東京都 国分寺市 本町	13-214	8	36° 17′ 59″	140° 11′ 33″	20200804 ～ 20200805	10	集合住宅
殿ヶ谷戸遺跡 第18次調査	東京都 国分寺市 南町	13-214	21	36° 17′ 59″	140° 11′ 03″	20200910 ～ 20200915	8.21	分譲住宅
本町(国分寺村 旧官邸時代) 遺跡 第19次調査	東京都 国分寺市 本町	13-214	28	36° 17′ 52″	140° 11′ 16″	20201210	7.22	集合住宅
Na 35 遺跡 第1次調査	東京都 国分寺市 日吉町	13-214	35	35° 42′ 02″	139° 27′ 39″	20210219	30.47	寄宿舎
Na 52 遺跡 第1次調査	東京都 国分寺市 南町	13-214	52	36° 17′ 35″	140° 11′ 43″	20210201 ～ 20210203	11.84	宅地造成・分譲 住宅
Na 52 遺跡 第2次調査	東京都 国分寺市 南町	13-214	52	36° 17′ 34″	140° 12′ 20″	20210301 ～ 20210305	8.45	宅地造成・分譲 住宅

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武蔵国分寺跡	集落跡	旧石器・縄文・奈良・平安・中世・近世	竪穴建物（プラン確認まで）	縄文時代の土器、奈良・平安時代の瓦・土器	本調査 MK762 次調査に移行
武蔵国分寺跡	集落跡	旧石器・縄文・奈良・平安・中世・近世	竪穴建物 12 (S1831～842)、土坑 20 (SK3476～3490・3492・3495・3491J・3493J・3494J)、小穴 18	縄文時代の土器・石器、奈良・平安時代の瓦・土器・鉄製品・石製品	MK761 次調査を受けて実施した本調査。
花沢西遺跡	集落跡	旧石器・縄文・弥生	なし	なし	
殿ヶ谷戸遺跡	集落跡	旧石器・縄文	なし	縄文時代の土器	
本町（国分寺村石器時代）遺跡	集落跡	旧石器・縄文・奈良・平安	なし	縄文時代の土器	
No. 35 遺跡	散布地（包蔵地）	縄文	なし	なし	
No. 52 遺跡	散布地（包蔵地）	旧石器・縄文	なし	なし	
No. 52 遺跡	散布地（包蔵地）	旧石器・縄文	なし	縄文時代の石器	

※文化財保護、教育普及、学術研究を目的とする場合は、著作権者の承諾なくこの報告書の一部を複製して利用することができます。なお、利用にあたっては、出典を明記してください。

## 令和2年度 国分寺市埋蔵文化財調査概報

---

発行日	令和4年(2022)3月31日
編集	国分寺市教育委員会 国分寺市遺跡調査会
発行	国分寺市教育委員会 〒185-0023 東京都国分寺市西元町1-13-10 (武蔵国分寺跡資料館内 ふるさと文化財課)
印刷	株式会社アトミ

---

©Kokubunji City Board of Education 2022. Printed in Japan

表紙	アートポスト	菊版	125kg
本文	マットコート	A判	57.5kg

令和6年(2024)7月8日 デジタル版作成